

どきどき自然生活—サンプル—

1

最近、思うように疲れが取れない。よく眠れない。そのせいで仕事のパフォーマンスが落ちている。

そんなことを産業医に相談したところ、一度休暇を取って都心を離れ、自然と触れ合ってみたらどうかと提案された。

高速道路のサービスエリアで昼食を取った大里は、ひたすら山に向かって車を走らせ続けた。都会のビル群はなくなり、すでにコンビニさえ見当たらない。

「……まだ先なのか」

うんざりしながらカーナビの指示に従って山道を進むことさらに一時間。大里は、指定された無人の駐車場で車を降りました。

三百六十度、ぐるりと広がる木、緑——山。

こらえきれずため息をつく。

が、大きく吸った空気がうまかった。それに真夏とは思えないほど涼しい。

（自然と触れ合う、か——）

せっかくの休暇なら、かわいい男の子と過ごしたい。

自然より、男の子と触れ合う方がストレスは発散されるのだ。そんなよこしまな思いを感じ取ったのか、産業医が紹介してきた「どきどき自然生活」は、男の子とも自然とも触れ合いながら過ごせる施設——らしい。

しかしあまりにも自然の中すぎる。

もう何度目かわからないため息をこぼし、ポケットに財布と携帯があることを確かめて歩きだす。ここからしばらくは徒歩で道なりに進むのだと、渡された地図には書かれていた。

（それにしても……本当に山の中だな……）

今日から休暇は取ったが、昨日も深夜まで仕事だった。多忙のあまり、産業医から渡されたパンフレットは机に放置。ろくに説明を読むことすらできていなかった。

（未成年者お断りのマークがあったことだけは覚えて
いるが……）

しんとした木々の中を進む。時折聞こえる葉のささやき。お世辞にも歩きやすいとは言えない地面。普段から移動は車で毎日パソコンにかじりつき、三年も前に四十路を過ぎた大里には修行としか思えない道のりだった。

すでに、失敗したなという思いが心を占めていた。断ればよかった。これでは着く前に体力を使いきってしまう。

それでもバックレることはできなかった。失礼なこととはしたくない。せめて、キャンセルするにしてもきちんと伝えたい。

右も左もわからないまま山を登り続けていると、木でできた門が見えてきた。

ようやく着いた……と膝に手を置いて荒い呼吸を整える。

(つ、疲れた……)

もう二度と登りたくない。それでも心身の疲労による休暇だというのに、余計に疲れが増している。

「あっ！ 大丈夫ですか？」

飛び込んできたかわいい声に顔を上げた。

大里に駆け寄ってくる二十歳くらいの若い男の子。くりっとした目。健康的な肌の色。小柄で、身長は百六十センチくらいだろうか。体重は五十キロあるかないか。服装は原始人が着ていそうな茶色い簡素なワンピース。足元は藁草履。そのすらりとした足を見て、仕事中の一時だけだとしても本当に山で過ごせるのだろうかと心配——するまでの一瞬の間で、疲れは意識から消えていた。

背筋を伸ばす。

「あ——ああ、思ったより遠くてね」

かわいい男の子を前に見栄を張った。

しかし男の子は、批判的な言葉にとらえたようだった

た。しゅんとして肩を落とす。

「すみません……」

「いや！ 違うんだ、変な意味じゃなくて……自然が
たくさんあっていいところだね」

自然がたくさんあるというより、自然しかない。こ
で一週間もいったい何をして過ごせというのだろう。

しかしそんな大里の気持ちを吹き飛ばすように、男
の子は人懐っこい笑顔を浮かべた。

「はい！ 木陰は涼しくて、川もきれいなんです！」

（……かわいいじゃないか！）

来てよかった。キャンセルなんてしなくてよかった。

ひいひい言いながら山を登ってきたかいたがあった。

自然と大里の顔が笑む。

「これから一週間、お世話になる大里です。よろしくね」

「タツキです。えっと……お相手は僕でもよろしいで
すか」

今度はちょっと不安そうな顔。その豊かな表情が気
に入った。一週間、こんなにかわいい子と過ごすことが
できるのかと心が弾みだす。

「君がいい。逆に、私のようなおじさんと過ごすのは嫌
じゃないかな」

この子はきっと、大里の半分くらいしか生きていな
い。

「とんでもないです！ その、素敵で、ちょっとドキド

キしています。こんな山奥までお越しくださりありがとうございます。これから一週間、よろしく願います」

話し方もハキハキしていた。甘えん坊も好きだが、自立した子もかわいい。

（来てよかった）

じんじんと痛み続けている足の裏も報われる。

「こちらこそよろしく」

「中にどうぞ。ご案内します」

門からさらに、十五分ほど山道を歩いた。運動不足がたたって足腰が悲鳴を上げていたが、かつこ悪い姿は見せられない。

タツキが足を止めた時、大里の膝は震えていた。一方で、細身のタツキは少しも息を切らせていない。

「こちらです」

「……ここ？」

「はい！」

まぶしいほどの笑顔。しかしその奥に存在するのは、人工物など一つも使っていないような小屋だった。

「まるで開拓小屋のようだな……」

つぶやきを、タツキに拾われた。

「あ……でも造りはしっかりしていますから……」

「徹底しているね。まさか電気は——」

タツキの眉尻が下がる。

「ありません……」

「携帯の電波は」

「入りません……」

「……本当に？」

言いながら、ポケットから携帯を取り出す。最近ではほとんど目にする事のない圏外の文字。

（……マジか……）

「あっ、あの、でもここでの生活、すごく楽しいですよ！」

そりゃあ、仕事なのだから客に楽しくないとは言えないだろう。そんな卑屈な気持ちを抱いてしまうほど、まさに自然派な施設だった。

そんな思いが、表情に出てしまっていたようだった。

「……携帯もネットも使えない場所で僕と二人きりでは退屈でしょうか……」

「あっ、すまない、そういうんじゃないんだ。ちょっと驚いただけというか……そうだね、携帯が使えないということは、つまり誰にも邪魔されずに二人きりで過ごせるということだよね」

フォローしたものの、タツキは目に見えてしょんぼりしてしまった。

「はい……」

「……本当に申し訳ない」

「いえ……」

どうやら、大里の浅慮のせいで自信をなくさせてしまったらしい。

しかしそんな姿が、より一層かわいく見えてしまった。抱きしめて押し倒してしまいたくなる。

（いや、だめだ、そんなのは最低だ……）

「違うんだ、本当に……退屈だなんて思ったりはしていない。ええとそれで……ここでは自給自足なのかな。それとも食事は届くのかな」

いつまでも引きずってはいけなかったのか、タツキはまだ悲しげな様子で、それでも無理やり笑顔を作った。

「野菜は畑にできています。お米と、お肉は干し肉があります。お魚は自分で釣ります」

そこまでしないとイケないのか、とげなりした。確かにこの子と過ごすのは楽しそうだが、便利さに慣れた体に、食事の度の野菜の収穫や魚釣りは大変すぎる。

（しかし産業医の勧めだし……）

まあその不便さこそが自然な生活なのかもしれない、と意識を切り替える。それに一週間の我慢だ。都会に戻ったら、ゲイ向けデリヘルから連泊で男の子を呼べばいい。

「釣るか。私はしたことがないんだが」

「大丈夫です。本当だったら川で釣るんですけど、釣れなかったら食事がなくなってしまうからです、いけす

があるんです」

「へえ」

都会の喧騒から離れつつ、それなりに不自由がない生活ができるように整えられているのだろう。

「ええと……そうだ、トイレや風呂はあるのかな」

「本当はそこも自然体がよかったんですけど、さすがに衛生は大切です。外になりますけど、ありますよ」

タツキの視線を追うと、小屋とは別に小さな建物があつた。

よかった、と言ってしまいそうになる口を一度閉じてから、「そうなんだね」とだけ返す。

「室内をご案内します。って言っても、狭いですけど」

タツキに促され、小屋に入る。

(……まあ、想像どおりだな)

広い土間。そして三十センチほど高くなった居間。室内は整えられているし、清潔感もある。が、数十年前の、社会の教科書に載っていきそうな内装だった。床は硬い木の板。防寒用か、藁でできたマントのようなものが壁に吊るされている。言わずもがな、電化製品は一つもない。

(ここで一週間……か)

胸中が無になった。

しかし同時に、何か言わないと、と焦る。何か、この子を傷つけないような褒め言葉を――。

「あ、囲炉裏もあるんだね」

「はい！　これでお鍋を作るととてもおいしいんですよ。魚を焼いたりもできますし」

「それはうまそうだ。……が、すまない。私は料理が得意ないんだが」

「僕が作るのでご安心ください。お世話は全部僕がさせていただきます」

「全部？　してくれるの？」

そのお世話はどこまで含まれるのだろうか。つい、下世話な想像をしてしまう。

が、その含みには気付かなかったようで、タツキの大きな丸い瞳がきよとした。

慌てて事情を話す。

「実は、ここを予約したのはうちの産業医なんだ。少し休んだ方がいいと言われてね。昨日まで仕事が忙しかったものだから、あまりちゃんと資料も読んでいないくて」

正確には、パンフレットの表紙をチラリと見ただけだ——偶然視界に入ったものを「見た」と言ってもいいのなら。一応地図と一緒に持っては来たが、結局目を通すこともなく、今は車の助手席に放置されている。

タツキはバチバチとまばたきを繰り返した。

「そうでしたか。大変でしたね。僕、大里さんを癒やせるように頑張ります！　身の回りのこととか」

「でもそんな、大変じゃない？」

それだけでなく、食事の度に収穫や釣りをしなければならぬのだ。

「いえ！ 全然！ 体を休めながら、自然のよさを知ってください」

「そう。それならよかった」

タツキは本心から自然が好きなのだろう。

「あつ、つて言っても、そんな凝った料理はできないんですけど」

「キッチンはどこに？」

自分にもできることがあれば手伝おうという軽い気持ちで訊いたのだが、タツキは肩を落としてしまった。

「……さっきの土間に」

「土間？」

入ってきたところを振り返ると、たしかにそこにはかまどがあった。隣にはタツキの腰の高さほどの大きな水瓶があるが、まったく目に入っていなかった。

気付けない程度の台所。そんな悪い印象を持たせてしまった。

「ごめんね、家の中に気を取られていたものだから」

「質素ですみません……」

「違うんだ、本当に。珍しい内装だったから、それで——」

「いえ、えっと……」

タツキの方も、大里に気にさせてしまったと思ったようだった。必死に話題を探している様子がひしひしと伝わってきて、咄嗟にわかりきったことを訊いた。

「あれは水瓶だよね？」

「あ、はい。井戸もありますよ。って言っても上下水道が通ってるので、井戸から清潔な水道水が出るんですけど」

「——そうか。すごいね」

また、よかったと言ってしまったそうになった。そのせいで感情のない返事になってしまった。

「しばらくは電気のない生活に慣れないかもしれないかもしれません。でも二日もすれば慣れますから」

もう開き直るしかない。何よりこの子を傷つけたくなかった。

「うん、わかった。よろしくね」

手を差し出すと、タツキは一瞬驚いた後、かわいい顔ではにかんだ。心にメリハリがあって切り替えが早く、表情豊か。それがとても魅力的だった。そして、握り返してくる小さな手も。

「こちらこそです！　じゃあ早速、自然な姿になりましょうか」

「自然な姿？」

「はい！　その……は、裸に……」

威勢のよかったタツキが、急に恥ずかしげに膝をす

り寄せた。

「裸？ 裸で過ごすの？」

「はい。特に普段スーツで過ごしている方には、開放感を味わっていただく、みたいな……」

「ああ、そうか。そういうことか」

驚けば、またタツキを傷つけてしまうかもしれない。当然衝撃は受けていたが、なんとか必死に取り繕う。

「タツキくんも裸……ってことだね？」

「は、はい……その、恥ずかしいですけど」

俄然やる気が出た。生活の不便さなど、もうどうでもいい。

（そうか、未成年者お断りというのはそういうことか）
確かめもせずに前のめりで合点する。

「見たいな。ぜひ見たい。見せてほしいな」

「えっと、じゃあ……」

タツキが原始人のような服を脱ぎ捨てる。どうやらそれ一枚しか着ていなかったようで、下着もなく生まれたままの姿になった。

「ああ……そこも自然なんだね」

視線だけで陰部を示す。

「あっ……」

タツキが逃げるように腰を引いた。しかし手で隠すようなことはしない。

自然——彼にとっての自然な姿は、皮被りだった。仮

性か真性かは触れてみないとわからないが、大きさも愛らしい。控えめなピンク色は、いつまでも見ていられそうだった。

そして自然といえば本来なら生えつばなしを指すのだろうが、そこはつるりとしていて毛の一本も見当たらなかった。そのおかげで、かわいいものが根元から先端まで——中身以外は——しっかりと見えた。

「その……か、開放感、です……」

本気で言っているのだろうか。いや、そういうふうに言えと会社に指示されているのだろう。すべてにおいて自然の生活になりきる。料金は安いものではなかったし、徹底しているのだろうと推測する。

「うん、そっか、そうだね。タツキくんは服を着ているより、裸の方がよく似合ってる」

一週間、この子の裸を見て過ごせるのか。そう実感した瞬間に興奮した。もう、この原始的な生活の不便ささえどうでもよくなってきた。

（かわいいな、本当に）

全身見放題。乳首も腹も背中も、尻も。それでもやはり、どうしても視線は股間に向いてしまう。

（真性か、仮性かだけでも先に知りたい）
訊けば教えてくれるだろうか。それとも触って確かめてくださいなんて——。

「あの、大里さんも脱いでください……」

僕だけ裸なんて恥ずかしい、と言わんばかりの表情を見て、体の芯に熱がとる。

（裸が自然ということは……）

ここにコンドームなんて無粋な人工物はないだろう。つまり、もしタツキとセックスできるとなれば、生で愛し合うことになる、ということだ。

（最高じゃないか！）

裸で過ごすと言ったのも、パイパンにしているのもタツキなのだ。据え膳食わぬは男の恥。裸での生活を求めておいて、まさかセックスは禁止、なんてことはないだろう。ないと思いたい。せめてフェラチオくらいは許されたい。あと兜合わせも。素股も。できればやっぱりセックスも。

「大里さん……？」

「え？ ああ、ああ、そうだね。すまない、つい——」

「つい？ どうかされましたか」

「いや、なんでもないよ」

大里が服を脱ぎ捨てると、タツキはかいがいしくその服を畳み、棚の上に片付けた。

しかし大里に背を向けたまま、なぜかなかなかこちらに向き直らない。

「タツキくん？」

「あ……すみません……その、は、恥ずかしくて」

「裸が？」

もうすっかり見た。アナルと会陰、脇と足の裏以外は全部見た。それでもまだ恥ずかしいのだろうか。

「いつもは裸で過ごしていないの？」

「いえ、裸です。でも……その、今は大里さんがいらっしやるから」

「見られるの、恥ずかしい？」

「ど、どっちも……です」

（どっちも……？）

見られるの。そしてそれに対するのは――。

（他人の裸を見るのにも慣れていないということか？）

しかしいつもここで客を迎え入れているのだろうか。初々しさを売りにしているのだろうか。それとも、本当に恥ずかしがっているのか。

小さくなった背中。俯き加減によって強調されるうなじ。

愛らしすぎる。つい、いじめたくなってしまう。

しかし、他の男の裸を思い出させるようなことは言いたくなかった。

「普段どおりに過ごしてほしいな。いつもおちんちんをぶらぶらさせながら生活しているんだろう？」

「あ……」

背後からでも、タツキの耳が赤くなっているのがわかった。

「かわいい」

「そんな……」

触れてしまったかった。が、まだ知り合ったばかり。さすがに許可もなくそんなことをすれば嫌われるかもしれない。それに今回は許されたとしても、次回以降利用禁止なんて措置を取られてしまったらたまらない。

（それだけは避けなければ）

定期的に来たい。開放感。人間のありのままの姿。それが本来あるべき姿だ。

「タツキくん」

「す、すみません」

タツキがおずおずと振り返った。

真っ赤に染まった頬。無意識に、大里の視線が下に移動する。視界の中心にあるのは、わずかながら起ち上がりを始めている小さなベニス。

「ああ、おちんちんが」

「っ……」

しかし、膝をすり寄せるだけでタツキはそこを隠そうとはしない。

（そうか、隠すのは自然体ではないからか……）

もう、ここでの生活を知った時の衝撃など忘れていた。素晴らしい場所じゃないか。楽園だ。

「皮を被っているのも、それが自然な姿だからなのか」

「っっ……」

タツキのペニスの角度が変わる。

「そんなふうになったら、おちんちんはどうするのが自然？」

オナニーだろう。せっかくだから観賞したい。ここでの滞在は一週間もあるのだ。いや、一週間しかないと言うべきか。しかし焦らず、順を追って楽しみたい。

だが、期待に反してタツキは首を振った。

「ん？ わからない？」

「いえ……その、お、オナニーのこと……ですよね？」

「うん。そうだよ。おちんちんが起ったらオナニーをするのが自然だと思ったんだけど、違ったかな」

それとも、「二人でいるんだからセックスが自然です」なんてことを言われるのだろうかと期待する。

しかし、タツキはまたも首を横に振った。

「うん？ オナニー、しないの？ 仕方がわからない？」

教えてあげるプレイが始まるのかもしれない。だってタツキはここで暮らしているという設定なのだ。当然、本当に産まれた時からずっとここにいるわけではないことはわかっていて、『AVもエロ本もない場所なので、オナニーを知らない』という設定があってもおかしくはない。

「自然に……その、自然に出るのを待ちます……」

「自然に出る……？」

ひょっとして夢精か。勃起しても興奮しても我慢して、自然に出るのを待つのか。

(エロすぎないか……?)

セックスの誘いをされるよりもいやらしい。

「その自然ってもしかして——寝ている時に」

「は、はい……」

「ああ……」

思いどおりの返事にたまらず天を仰いだ。

年頃の男の子が、オナニーを我慢して夢精を待つ。最高以外の言葉が浮かばない。

「そう……じゃあ、おちんちんをいじってあげるののだめなんだね」

「あつ……」

そんなことはない、と言いたげな顔だった。自分ではできないけれど、される分にはかまわない、のかもしれない。

しかしせっかくだから、もっといやらしい姿を見たかった。

「タツキくんはそうやって自然体で生活しているんだから、私にはそれを邪魔するなんてできないな」

「あ……大里さん……」

「夢精ってことは、寝ないとだめだね。今すぐ寝る？それともおちんちんが落ち着くまで見ていようか」

「……そんなっ……」

じつと股間を見つめていると、まるで子どものようなサイズのそれがびくびくと動いた。

「ああ……おちんちんがかわいそうだ。まだ快感を知らないんだね」

タツキの淫らさに、大里のペニスは完全にいきり立っている。

勃起なんていつぶりだろうか。このところ多忙による疲労で性欲なんて消えていた。

床にあぐらをかき、タツキに見せつけながらペニスを握る。

「勃起したら、こうして刺激するととても気持ちいいんだが」

「あ……あ……」

物欲しげな顔。タツキの皮の先端からたたりと透明な蜜が垂れた。

腕を伸ばしてそれを人差し指で掬い取り、自身の亀頭に塗り込めてしゅこしゅここと竿をしごく。

「ああ…… すごくいいよ。でもタツキくんのおちんちん、もう少し近くで見たいな。決して触れないから、近くに来てもらってもいいかな」

「あ……あ……」

もう、タツキは大里のオナニーに見入っていた。それでもゆっくりと歩み寄ってくる。一歩動く度に、上下に揺れるペニスが卑猥だった。

「ああ、ありがとう」

タツキの小さなペニスが、大里の眼前に來た。至近距離からそこを見つめ、鼻を鳴らして匂いを嗅ぐ。

「アッ……」

「いい匂いがする。若い男の子の匂いだ」

「あ……あ……大里さんっ……」

「タツキくんのおちんちんの皮はむけるのかな？ 真性？」

「っ……」

「教えてくれる？」

訊きながらも、鼻から息を吸う。

ところと流れ落ちるカウパー。舌を出し、ペニスに触れぬよう口を含む。

「あっ……」

「おいしい。おちんちんを舐めたらもっとおいしいんだろうな」

「ううっ……」

「タツキくん、教えて。皮はむける？」

「わかつ、わかりませっ……」

「わからない？ ああ、そうか。おちんちに触れるのは自然なことじゃないもんね」

とはいえ、体を洗う時にむけるかどうかは試してはるはずだ。でも今は、そんな野暮なことはいいたくなかった。

「おちんちんが苦しそうに泣いてるね」

「だってっ……」

「男のオナニーを見るのは初めてじゃないだろう？」

「えっ……」

その反応で、もしやと思った。

しかしこれも性風俗の一つだろう。それなのに——いや、単にみんな、セックスに夢中でオナニーはしないというだけだろうと思い直し、そして他の男のことは頭から追い出す。

「タツキくんも気持ちよくなりたいね？」

「はいっ……！」

「じゃあどうしようか。寝る？　寝ないと夢精はできないよね」

「やあ……」

タツキはもう、今にも泣いてしまいそうだった。

けれど、そうしている間もタツキのペニスは愛蜜を垂らし続けている。

「透明なのが出てきてる。このまま白いのを出せたら楽になるんだけどな」

大里のペニスからも、先走りの水音が立っていた。久しぶりということもあって、絶頂は近い。

「やあ……大里さんっ……」

「タツキくんがかわいすぎてイってしまいそうだ。イク、というのはわかるかな。射精するという意味なんだ

が」

見せつけオナニーをしながら、淫らな質問を投げかける。

タツキは顔を赤らめ、ハアハアと息を荒げていた。

「ティッシュはあるのかな？ どこに出したらいいんだろう」

「あ……あ……」

もう、タツキの頭が回っていないことは明らかだった。もっと追い詰めたい。かわいい顔を見たい。

「このままではタツキくんの部屋を汚してしまうよ。外に行けばいいのかな」

「っ……て、に……」

「ん？」

「て……手に、手に……」

タツキが床に膝をつき、両手を器の形にして大里に差し出した。

「ああ……精液を受け止めてくれるのか。ありがとう」

これまでのどのオナニーよりも、セックスよりも興奮した。性欲に耐える若くてかわいい男の子の前で快感を貪り、その手に出す。しかもその姿はまるで、尊いものを捧げられるのを待っているように見える。

「ああ本当に、言葉にならないくらい気持ちいいよ」

苦しそうなタツキのペニスを凝視しながら、しごく手を速める。

「っ——…」

ぎりぎりの理性で、ペニスがタツキの手に触れてしまわないように加減した。

白濁が、二度三度と小さな手を染めていく。

「あ……」

「っは……最高だった。ありがとう」

「いえ……」

タツキがぎゅっと目を閉じる。

ペニスは可哀想なほど膨らみ、赤くなっていた。

「手を洗おう。ええと……」

水瓶に手をつ突っ込ませるわけにはいかない。

しかし今だけはトイレや風呂を使わず、このテーマである自然の中で片付けをさせたかった。

「近くに川があったよね」

「あ……は、はい」

まだタツキの目は潤んでいる。

抱きしめたい欲望を必死に抑える。

「そこへ行こう。水はきれいなんだよね」

「はい、飲めるくらいに……」

「そう、よかった」

タツキが、大里用の藁草履を出してくれた。それを履いて、歩きだしたタツキに続く形で外に出る。

もう夕方だが、まだ日は高い。

「こちらです……」

タツキの勃起は、まだぶるんぶるんと上下に揺れていた。

「おちんちん、つらそうだ」

「っ……」

「すまないね、私だけ」

「いえ……その、開放的になってゆっくりしていただきたいので。我慢するのは『自然』ではありません」

では、夢精するまで我慢しようとするのは自然ではないのではないか——そんな疑問が頭に浮かんだが、都合よく忘れておくことにする。

「ですから……またおちんちんが膨らんだら、我慢せずしてください」

「ありがとう」

川は、開拓小屋から十メートルほどのところにあつた。幅は一メートル、深さは大里の膝辺りだろうか。聞けば、畑の水もここから引いているという。

「どれ……」

手を伸ばし、透き通る水に手を浸す。

「思ったより冷たくないんだね」

「はい。暑い日はここで水浴びなんかもします」

「その割には日焼けしていないね」

健康的な肌の色で、真っ黒ではない。衣類の日焼けラインはないが、山にいない間も仕事のことを考えて日焼けサロンに行くか、もしくはこれが元からの肌の色

で、日焼け止めを使ってラインが出ないように気を付けているのかもしれない。

「この辺りは木陰が多いので、そんなに焼けないんです」

辺りを見回す。小屋のある辺りは日差しがあるが、たしかにその周りは木々に覆われて日陰になっている。

「そっか。じゃあ今度私とも水浴びをしてくれる？」

「はい、ぜひ」

タツキの手を、川の水の中でこすってやる。

「あっ……」

甘い声。

「ん？ 手を洗うだけでも感じてしまう？」

「っ……だって……」

「最後に、いつ射精したのかな」

「えと……さ、三週間くらい前……かと……」

「そんなに前なの？」

「ううう……」

それはつらいだろう。もしかして、会社にオナニーを禁じられているのだろうか。

「小屋に、カメラがあるなんてことはないよね？」

「え？」

「あー……誰かに見られてる、なんてことは」

「いえ、ありませんけど……？」

ではどうしてそこまで我慢するのだろう。

（ここにいる間は我慢するというのならわかるが……）

それとも大里が来る直前まで他の客がいたのだろうか。

「あの、どうかなさいましたか」

「ああいや、なんでもないんだ。ただ、どうしてオナニーしないのかなって」

「夢精……が、自然な姿だと思って……」

「うん、そうだね。そうかもしれない。でもつらいだろう？」

「はい……でも夢精、気持ちよくて」

そういうことか、と合点する。この子はきっと極度のMなのだ。貞操帯も使わずに、己に射精管理をしているのだ。

「えっちでかわいいね。さあ、これできれいになったかな。あとは水道で石鹸を洗おうか」

「いえ、このままで」

「だが——」

二倍も年を取った男の精液だ。嫌ではないのだろうか。

（それよりも、石鹸を使う方が嫌ということか？）

まだ顔を合わせたばかり。手探りで少しずつ知っていくしかない。

「……うん、わかった。じゃあ、おちんちんを洗ってあ

げよう」

「えっ」

「カウパーでぬるぬるだよ。きれいきれいしてあげる」

「あ……でも……」

「うん？ おちんちん、触られるのは嫌かな。怖い？」

我ながらずるい訊き方をする。

「いえ！ そんなことは……全然……でも……」

いつてしまいそう、ということだろう。

「大丈夫、おちんちんが射精してしまわないようにするから」

「あ……」

期待を打ち砕かれたような表情。

言葉とは裏腹に、この子の顔はとても素直だ。

「さあ、ぬるぬるを流そうね」

タツキの手を取り、藁草履を脱いで一緒に川に入る。

「冷たい？ 大丈夫？」

「はい……うう……」

タツキのペニスは硬く勃起している。この川の水に触れただけで、少しはしずまるだろう。

（夢精するところは絶対に見たい）

そうなると大里は寝られなくなってしまうそうだが、
なんとしても見たかった。

「さあ、おちんちんを」

タツキが膝を折り、ペニスを川に浸けた。

「あっ……くう……」

「ああ、おちんちんがしぼんでしまった。でもとてもかわいいよ。ほら、きれいきれい」

子どもにするように声を掛け、皮をむいて小さなベニスの先端を親指でこすってやる。

（仮性だ……仮性……かわいい……仮性……）

「あつ、アッ」

「おっと、また膨らんできてしまった。オナニーをしていないから、刺激に弱いんだね」

舐めしゃぶってしまいたかった。大里がないといられない体にしてしまいたい。けれど、我慢——。

「ああんっ、あつ、アッ」

「いやらしい声だ。山の中で裸でおちんちんを洗われて、開放感があつて気持ちいいね」

「アアッ！ アアッ！」

タツキがぎゅうつと大里の腕に縋りついた。

（なんて愛らしいんだ……）

もっと求めさせたい。大里に性感を求めさせたい。

「ああっ、あああつ！ アッ、アッ」

声が跳ね始めた。

そろそろ限界だろうというところで手を離す。

「——うん、きれいになったかな」

「あつ——や、そんなんっ」

「ん？」

「あ……やあ……」

イきたかったのだろう。しかし今イかせたら、夢精させられなくなってしまった。

露出させた先端を皮の中に戻す。

「おちんちん、きれいになったよ。ちゃんと皮の中でいいにしてる。さあ、体が冷えてしまう前に小屋に戻る」

しかし諦めがつかないのか、タツキはその場から動こうとはしなかった。

「甘えん坊さんかな？　かわいいね」

抱き上げると、タツキのペニスが揺れた。

「あっ」

「おちんちん、夢精したら楽になるから」

つい、そこを見下ろす。

そして一緒に視界に入る濡れた腹や足。

（すごいな……）

若さゆえに張りがあるからだろうか、水滴が丸くなって肌の上に留まっている。

「……大里さん……？」

「ああ、すまない。つい見とれて」

「あ……恥ずかし……」

「かわいいよ。それにきれいだ」

今日は早く寝ようねと言いながら小屋に入ったところで足が止まった。

「……タオルはあるのかな」

「あ、はい。手拭いが」

手拭い。ここに来た時なら信じられない気持ちになっただろうが、今は風流にさえ感じられる。

華奢な体をそつと土間に下ろすと、タツキはすぐに引き出しから手拭いを取り出した。自身の方が濡れているというのに、先に大里の手足を拭いてくれる。

「……ありがとう」

特に足を拭かれるとたまらなかった。裸で奉仕をされている。

タツキが大里の足を拭き終えて立ち上がろうと上を向いた時、大里の勃起越しにタツキと目が合った。

一瞬、勃起の方に動いた黒目。頬を赤く染めながら下を向く小さな頭。

「どうかした？」

「いつ、いえっ」

タツキは耳まで真っ赤にして、けれどそれをごまかすようにてきばきと体を拭き始めた。

「拭いてあげるよ」

「いえっ、すぐですからっ」

かわいい。

「でもおちんちん、ちゃんと皮をむいて中まで拭いてあげないと」

「っ……」

「ほら、貸してごらん」

背後から抱きしめるようにしてタツキの腰に勃起を押し付け、下腹部に手を回して小さなそれをそつとむく。

「ほら、今だよ。自分で拭けるかな」

「っ……は、はいっ……」

タツキの体温が高い。

が、焦らしたい。目的は夢精なのだ。

タツキが亀頭を拭き終えたところで体を離す。

「ええと……食事の支度はどうしたらいいのかな」

「すみません……僕がやりますから……」

「少し休んでいていいんだよ」

「いえ……動いていた方が」

「が？」

「っ……」

タツキが潤んだ瞳で大里を見上げた。

「かわいい。じゃあ指示してくれるかな。私も一緒に頑張るよ」

とは言ったものの、結局なんの役にも立てなかった。

土鍋で炊かれた絶品の白米。そして山の幸が満載の鍋。

「とてもおいしかった。ありがとう」

「お粗末様でした」

調理の途中から、タツキのペニスは落ち着いていた。それが寂しくもあったが、全裸でちょこまかと動く様子は愛らしく、大里は味にも調理過程にも大満足していた。

「洗い物は私がしよう」

「いえ、僕がしますから。せっかくのお休みですから、ゆっくりなさってください」

礼を言い、藁草履を履いて外に出る。

夏の陽は長かった。腕時計に視線を落とす。十七時半。

（そういえば虫がいないな）

蚊に刺されるかと思ったが、気配すら感じない。

（何か対策でもしてるのかもな）

気にはなったが、あまり野暮なことは訊きたくなかった。

川のせせらぎを心地よく感じながら、これからどう過ごそうかと考える。

（風呂は一緒に入りたい）

もちろん手で全身洗ってやる。これだけ自然にこだわっているのだ。石鹸くらいはあるかもしれないが、きつとボディタオルはないだろう。

（射精直前で止めてやらないと）

今度こそタツキは泣いてしまうかもしれない。でも泣き顔もそのるので、優しく抱きしめて「おちんちんつらいね」とわざと意識させるように慰めてやりたい。

「大里さん」

振り返ると、タツキが引き戸からひょこりと顔を覗かせていた。

「ああ、終わった？　どうもありがとう。おかげ様で、んびりした食後をごせたよ。でも明日からは私もするからね」

「お気遣いなく」

タツキが外に出てきて隣に立った。空を見上げる。

「あ、月が見え始めていますね」

「うん。明かりがないから夜には星もよく見えそうだ」

「すごいですよ！　ここの星を見たら、もう都会の夜には満足できないと思います」

「うん、そんな気がする」

タツキが持ってきたゴザの上に並んで座り、しばらく静かに二人で空を見上げていた。

けれど突然、タツキがはっとした様子で立ち上がった。

「どうしたの？」

「お風呂のお湯を沸かしてきます」

「シャワーだけで——」

言いかけて、ああそうかと気付く。

「シャワーはないんです。なのでお湯を沸かさないと」「じゃあ私も行こう。残念ながらできることはないかもしれないが、ここでの生活の仕方を教えてほしい」

「はい！」

小屋から少し離れた場所にある風呂場。こちらにも古い建物を模して造られているようだったが、造られてからそう時間は経っていないように見えた。

高いところにあるろうそくに、タツキがマッチで火をつけた。

浴室がほんのりと明るくなる。

（マッチは使うのか……まあ、そりゃあそうか）

そういえば調理の際も使っていた。さすがに火打石で火を起こしたり、その火を絶やさぬよう維持したりすることはできないということだろう。やろうと思えばできるのだろうが、客の相手が疎かになる。

「ひよつとして五右衛門風呂？」

訊きながら浴槽を覗き込む。

「はい。お湯に浸からない場合でもかけ湯になるので、夏でも沸かすんです。って言っても真夏はぬるま湯程度にしたりもしますけど」

最初に聞いていたとおり、風呂とトイレには水道設備があった。タツキが蛇口をひねって水を出す。

「火は裏でつけます」

建物の裏手に回る。そこにはすでに薪がくべてあった。

タツキが乾燥した葉っぱのようなものに火をつけ、それを薪にのせる。タツキが筒を使って息を吹きかけ

ると、火が移って火力が増した。

「さすがだな」

手際がいい。

「ありがとうございます。すみません、お湯が沸くまでにちよつと時間がかかるんですが」

「かまわないよ。それより、お風呂には一緒に入ってもいいのかな」

「もちろんです。僕がその……」

もじもじした様子。どうやら性的なことになると途端に恥ずかしくなってしまうらしい。

「洗ってくれるのかな」

「は、はいっ」

「じゃあ、タツキくんの体は私が洗ってあげよう」

「あ……」

タツキが逃げるようにうつむく。その愛らしさに、触れたいという欲を抑えきれない。

「おいで」

タツキの表情を確認しながら、そうつと腕を伸ばす。拒否したいがそれもできない、という顔をされるかもしれないと思ったが、タツキはするりと大里の腕の中に入ってきた。

「大里さん、体は冷えてませんか」

「タツキくんがかわいすぎてずっと興奮してる」

「興奮……」

「うん。早く全身を洗ってあげたい」

「っ……」

「安心して。ちゃんと射精してしまわないように加減するから」

「うう……」

タツキの体温がさらに上がった。感じている。素直さが愛らしい。

（これからの一週間が楽しみすぎるな）

手に石鹸をつけ、大里よりも二十センチは小さい体を背後から抱きしめるようにして肌に手を這わす。

「っは、アツ、あつ、んっ」

みずみずしい体。

「ん？ 乳首、硬くなってる。おかしいな、洗っているだけなんだが」

「おお、さと、さっ、アツ」

「おっぱい、きれいになったかな」

「なっ、なり、ましっ、たっ」

「そう。じゃあ他のところを洗おうか」

タツキのペニスはギンギンに硬くなっている。当然、大里のそれと同様だ。しかし大里は今日すでに一度射精しているのでもまだ余裕があった。何より、タツキが感じている表情がかわいすぎてやめられない。

「あんっ」

薄い腹を撫で、それからへそに指を入れる。

「んっ、あ、そんなあっ」

「ん？ おへそ痛い？」

「気持ちっ、ですっ」

「よかった」

くりくりと指の腹で優しく洗い、それからつるつるの股間に手を這わす。

「あっ……」

「大事なところだから丁寧に洗おうね」

「ンッ……」

少し触れただけで爆発してしまいそんなほど硬く、腹につきそうなほど反り返ったペニス。刺激しすぎないよう、そうっと握って撫でるように洗う。

「あ、あ——」

切羽詰まったギリギリの声に、慌てて手を離す。

「やあっ！」

「つらいね。でも高めておけば自然な射精をしやすくなるから、頑張ろうね」

夢精。それを自然な射精と言う淫らさ。

（セックスをしても、私だけが射精してタツキくんはすっきりしないまま寝ることになるのか……）

そしてタツキはいやらしい夢を見て夢精し、大里は朝にどんな夢を見たのか話させながら、その処理をしてあげる——最高すぎる。

「皮をむいて中まで洗うけど、射精してはいけないよ」
正面にしゃがみ、近くからペニスを観察しながら
ゆっくりと皮をむいていく。

ろうそくの暗い明かりでも、つるりとした果実のよ
うな先端は見えて取れた。

タツキが大里の肩をぎゅっと握った。
見上げると、目をきつく閉じている。

（必死だ……必死になっている）

なんて健気なのだろう。

「――ほら、皮がむけたよ。でもこれはタツキくんの自
然な姿ではないから、手早く洗うね」

亀頭を握り、手のひらでこねるようにこする。

「――アアアア！」

「おっと……」

慌てて手を離し、ペニスが精液を出してしまわない
かじつと見つめる。

タツキのそれは数回びくびくと動いたけれど、幸い
射精には至らなかった。

（よかった……）

ここでイかせてしまったのは、夢精を見られなくなっ
てしまう。

「おちんちん洗いはこのくらいにしておこう。夢精し
た時にしっかりきれいにしておあげるからね」

それから会陰やアナルも丁寧に洗い、全身を洗い終

えたところでお湯をかけて泡を流した。

「は……うう……」

「休んでいてかまわないよ」

「いえ、大里さんの体を……」

「洗ってくれるの？」

「はい……座ってください」

タツキが石鹸を泡立て、自身の股間に塗り付けた。

（まさかこれは……）

想像どおりだった。タツキは大里の腕を跨いで後ろ手に持ち、腰を振ってこすり始めた。

「あつ、アツ、あつ、んっ……」

「ああ……すごくいい。とても気持ちいいよ。こんなに気持ちいいお風呂は初めてだ」

「よか、った、ですっ、ンッ」

刺激がつかいのか、腰の振り方はぎこちなかった。しかしそれが懸命さを引き立てる。

「ご奉仕、上手だね」

「んっ、ありが、とっ、ございますっ」

「こんなにおちんちんをぴよこびよこさせて。目でも楽しませてくれるサービスだね」

「っはあんっ」

両腕を洗い終わると、タツキは大里を仰向けに寝かせて腰を跨ぎ、自身の胸を使って上体を洗った。

「んっ、あつ」

硬くしこった乳首が大里の肌をくすぐる。

「突起があるね」

「っ……」

「乳首を私の体にこすりつけてごらん」

もしかしたら、言わずともそうしていたのかもしれない。夢精しかできないタツキの、ささやかなオナニー。

「んっ……大里さんっ……」

「おちんちん、限界かな」

「はいっ……」

「じゃあ、ここまででいいよ。あとは自分で洗うから。」

どうもありがとう」

「けど……」

「いいんだ。体を洗ってもらうのもよかったけど、タツキくんの夢精を見たいって気持ちの方が大きいから。」

それに明日も明後日もあるからね」

「すみません……」

「私のわがままだよ」

背中を撫で、それからタツキを体から下ろす。

大里が体を洗っている間、タツキは恥ずかしいのか大里には背を向けていた。

風呂で楽しすぎたのか、外に出ると空には無数の星が広がっていた。

上を見ながら歩く。

「素晴らしい星空だ」

「はい、僕も毎晩見えています」

「これは見飽きないだろうね」

「はい。あ、けど足元には気を付けてくださいね」

手を引かれた。つなぐのではなかったところが残念だったが、まだ初日。

「外で寝るのも楽しそうだ」

「今夜、外で寝ますか？」

「そんなこともできるの？」

「ゴザを敷くだけになります」

「ふむ……」

満天の星を見ながら眠るのは絶対に気持ちがいい。

しかし星よりもタツキの夢精に軍配が上がった。

「いや、今夜は家の中で寝たい」

「わかりました」

「でも少し、星を見ていたいな」

「ええ。その間に髪も乾くでしょうから」

タツキが敷いてくれたゴザの上に二人並んで腰を下ろす。

（自然か……すごいな）

まだここにきて半日だというのに、もう都会の喧騒を忘れかけている。

（穏やかな時間だ……）

普段なら、今頃はまだパソコンと向かい合っていた。

栄養ドリンクを飲み、目頭を揉んで。そして電話が鳴って、返答や指示に頭を悩ませて。

ふと、視線を感じた。

「うん？」

「あつ、すみません」

視線に気付かれたと知ったタツキが、逃げるように顔をそむけた。

「どうしたの」

暗くてよく見えないが、その横顔は憂いをおびているように感じられた。

「……家に帰りたいのになって」

「真逆のことを考えていたよ。ここはいいな、と」

「本当ですか」

かわいい顔がずいと近づいてきて、思わず笑う。

「うん。きれいな空気、きらびやかな星空。それに、なんと说着てもタツキくんがいるからね。しかも二人きりで、邪魔者もない」

「あつ……」

離れた体を引き留めるように、腰にそうつと腕を伸ばす。

大里が腕に力を入れなくても、タツキの方から身を寄せてくれた。しかし緊張しているのか、少々体が強張っている。

「寝る前にすべきことはあったかな？」

無言で首を振ったタツキの、速くなった鼓動が伝わってくる。

「じゃあ……もう布団に入ろうか」

セックスをしたかった。

が、まずはタツキに夢精させたい。

今夜、タツキは淫らな夢を見るだろうか。そして実際に喘いだりもするだろうか。

(録画したい……)

しかし充電する場所がない。ハメ撮りをするならまだしも、いつするかわからない夢精を撮影するのは難しそうだった。

小屋に入ると、タツキが行燈あんどんに火をともした。暗い室内がオレンジ色に染まる。

(これはいい……)

LEDライトには出せないムードがあった。時代を感じる官能的な雰囲気。

「今寝床の支度をしますから、少しだけ待っていてください」

「ありがとう」

タツキが部屋の隅に丸めてあった敷物を広げた。枕はどうやら藁を束ねたものらしい。そして布団も、藁——。

(だろうな、とは思っていたが……)

寝られるだろうか。朝には体がバキバキになってい

そうだ。

(いや、寝なくていいんだ)

不安が表情に出てしまう前に考えを改める。

今夜はなんとしてでもタツキの夢精を見るのだ。そのためには、むしろ寝心地が悪い布団の方がいい。布団とは呼べない代物ではあるけれど――。

「あ、あのつ、意外と温かいんですよ。夏といえども山の夜は結構冷えるので」

大里の視線に気付いたタツキが、弁明するように藁でできた布団を叩いた。

「うん、そうだね。でも私は藁の温かさより、タツキと一緒に寝られるかどうかを考えていたんだけど」

「あ……はい、お邪魔でなければ」

「よかった」

敷物は薄く、その上に横になってもほとんど床に寝ているようなものだった。しかし、そんなことは予想どおりだ。今大里の頭の中にはタツキの夢精しかない。

枕元の行燈にも火をともしたタツキが隣に入ってきた。

「あの、お仕事で疲れてるんですね」

「タツキくんから元気をもらってるけどね」

「よかったら……」

タツキが真っ赤な顔で――炎のせいではないはずだ――寝転がる大里に腕を伸ばした。

「うん？ 腕枕なら——」

したい派だ。そう言おうとしたが、タツキに首を振られた。

「それですけど……その、お、おっぱい……」

「うん？」

「おっぱい、吸いながら……」

「……吸いながら寝ていいってこと？」

「はい……」

ぎゅっと閉じられたまぶた。まるで好きにしてくださいと言われていたかのよう。

「それはすぐ癒やされそうだ。ぜひ吸わせてもらおうよ」

細い腕に頭をのせ、すでに期待から硬くなった乳首を口に含む。

「んっ……！」

癒やすためのものとして与えておきながら、感じている。

（なんていい子なんだ……）

オナニーもできないというのに、こうやって健気に体を差し出してくれる。

（……これは吸うだけなのか？）

舐めたり、舌で乳頭を転がしたり、甘噛みをしたり、舌先で弾いたりしてはいけないのだろうか。

（逆につらいぞ……）

理性を総動員するが、それでもつい乳首を味わいそうになつてしまう。

「あの……」

「ん？」

しまった、欲望がバレたのだろうか。

「疲れ、取れますか……？」

「ああ……うん、とても。腕枕をされたのは初めてだけど、悪くないものだね」

「よかったです！　へへ」

かわいい。

このけがれのなさは、まるで本当に山の中で育ってきたかのような。

（山の精霊か？）

ありえない。が、オナニーよりも夢精を好むなど、人間ではないのかもしれない。

そうっと手を伸ばし、足に触れてみる。

「大里さん？」

「あ……すまない、ちょっと体勢を変えようと思ったら触れてしまった」

咄嗟についた嘘だったが、タツキは疑わなかったようだった。

「この体勢、疲れますか」

「いや、私はいいんだけど、タツキくんが疲れちゃうんじゃないかと思ってね」

「いえ、大丈夫です。疲れを取ってください。その……僕のおっぱいで」

かわいいすぎるじゃないか。

大里のペニスが臨戦態勢に入る。

「うん、ありがと——そうだ、おっぱいのお礼をさせてほしいんだが。タツキくんが夢精しやすくなるように、私にできることはないかな」

「あ……」

タツキの体温が一瞬で上がった。

「私にできることなら、何でもするよ」

「いえ……大丈夫です。何も」

「普段はどうしてるの？」

「どう？」

「夢精するために、何か特別なことをしてたりするの
かなって」

「えっ……！ な、何もしませんっ……！」

本当だろうか。恥ずかしくて言えないのか、本当に何もしていないのか。

「夢精のペースはどのくらい？」

「月に一度……くらいです」

「それはつらそうだ。週一でできるようにしてあげた
いな」

「え——そんなこと、できるんですか」

できるかどうかは、正直に言えば知らなかった。しか

しムラムラしていれば淫らな夢を見る確率は上がるような気がする。そうすれば、必然的に夢精につながるのではないだろうか。

「できるかどうかはわからないけど、可能性を高めることならできる気がするよ」

「どうしたら……」

「寝る前にたくさんえっちなことをしたり、言ったりするんだ」

「あ……はずかし……」

「うん、それでいい。恥ずかしいのも快感の一つだからね」

しかしそう言いながらも、さてどうしようかと悩む。
(こんなことならパンフレットをちゃんと読んでくるんだったな……)

裸で過ごしているし、何よりソープランドのような洗体してくれた。この施設も風俗と同じようなものだと思ってかまわないだろう——が、確証はない。

「あー……あのさ、タツキくん」

「はい」

「その……ここは、どのくらいなら触れてもいいのかな」

「ここ？」

「この施設」

「どのくらいというのは……？」

「タツキくんのおちんちんを舐めるとか、いろいろ。どんなことならしてもいいのかなって」

「あ……えっと……その、なんでも」

「なんでも」

つい、大きな声を出してしまった。

気圧された様子でタツキが答える。

「はっ、はいっ」

「ああ、すまない、驚かせたね。なんでも、というのはその……なんでも？ 本当に？」

返事はなかったが、タツキは目を閉じてこくと頷いた。

「そうか……嬉しいよ。じゃあ我慢は必要なかったんだね」

「あ……すみません、我慢させてしまっていましたか……」

まずい、また落ち込ませてしまう——と思ったら早口になった。

「違うんだ、私がほら、パンフレットを読んでこなかっただろう？ ここを紹介してくれた産業医からの説明もろくになくてね。タツキくんを怖がらせてはいけないなと思って、遠慮していた」

言いながら、これは至近距離で股間を見つめながら見せつけオナニーをした男の言う言葉ではないな、と内心で苦笑する。

「でも、もう我慢しなくていいということだよね」

「我慢？」

「触れたい」

「あ……はい……でもはずかし……」

「うん、そうだね。じゃあ明かりを消してしまおうか」

布団横の行燈の火を吹き消すと、室内が一気に薄暗くなった。思ったよりも暗いかもしれない。慌ててタツキに手を伸ばす。

「すまない、怖かったかな」

「いえ、いつも真っ暗な部屋で寝ていますから。大里さんが眠ったら全部の火を消そうと思っていました」

「そう、じゃあよかった。でもほとんど見えていないから、射精してしまいそうだと思ったら教えてね」

「アッ……」

脇腹に触れ、そこから乳首を狙って皮膚の上をたどっていく。

「あ……ん……」

「すべすべだね」

「んっ、そうですか……？」

「肌はすべすべで、おっぱいはこりこりで、おちんちんはぬるぬるだ」

「やあ……」

指先が乳首に触れた。勃起したそれを指先でコロコロと転がす。

「あっ、あっ！」

「付近に誰もいないと思うと、いくらでもいやらしい
声を出せるね」

大里のマンションは防音だが、壁の薄いアパートでは喘ぎ声が隣室に漏れてしまう。それはそれでプレイとして燃えるのだが、このような開放感も楽しかった。

「アッ……」

「かわいい声をたくさん聞かせて」

乳首を口に含み、水音を立てながら舌で揉む。

「アアッ！ それっ、それだめですっ！」

タツキが大里の頭を抱え込んだ。

舌で乳頭をこね、唇で挟んで横にしごく。

「あああっ！」

まだ目が暗闇に慣れない。が、タツキの体温と嬌声だけでじゅうぶんだった。

もう片方の乳首は指でこね続け、肌をついばみながら体を下へ移動する。

大里の顎に、小さな勃起がぶつかった。濡れている。

「あっ……」

「かなり限界みたいだね」

「はいっ……うう……」

「もっと触れたかったけど……今日はここまでにして
おこうか」

「え……」

「夢精を見せてほし——」

ハッとした。

この暗闇の中では、何も見えない。時間が経てば多少は目が慣れるだろうが、満足に見えるとは思えなかった。

（携帯のライトを使うか……？）

しかし、夜は長い。ライトをつけっぱなしにすれば確実に一晩で充電がなくなってしまう。

（今夜夢精するとは限らないし……）

こんなことならモバイルバッテリーを持ってくるんだった。

「あの……？」

「いや……ここにライトはないよね？」

「どうかされましたか」

「その……この暗さでは夢精が見えないなって思って」

「緊急事態用に懐中電灯はあるんですけど……」

「いや、いいんだ」

ルールを破らせるわけにはいかない。

「行燈を使いますか？」

「あ……」

どうしようか。行燈を並べれば見えるだろうが、火をつけっぱなしにして寝落ちしてしまったらと思うと怖い。

「いや、いいよ」

「……見えないとダメですか」

「え？」

「その……こうして……」

タツキが大里の手を取った。ゆつくりと、タツキの方に導かれていく。

「た、タツキくん……？」

着いた先はタツキの小さな勃起だった。

「握って……握っていただくんじゃないでしょうか」
小さな声は可哀想なほど震えていた。

「ああ……ダメじゃない。少しもダメじゃないよ」

寝ている間、急所を握らせたままにしておいてくれるという。なんて献身的で健気な子なのだろう。

「これならわかる。こうして握っていたら、夢精したらすぐにわかるよ」

「んっ……」

刺激しないよう、それでもこらえきれず優しく撫でる。

「嬉しいよ。本当に嬉しい。ありがとう」

「大里さん……」

「寝ている間におちんちんから白いのが出たら、ちゃんときれいにしておいてあげる」

「……はい」

「その時は、舐めても？」

「あ……」

顔は見えない。それでも、色っぽい声だけでじゅうぶんだった。

タツキが大里の上腕を握った。甘えるようなしぐさに胸が高鳴る。

（来てよかった……）

2

夏の朝は早い。

大里はぼうつとした頭を振り、体を起こした。

タツキはまだかわいい顔で眠っている。

（……残念だ……）

一晩中、寝ずに夢精を待っていた。

が、その時は訪れなかった。

まさか途中で眠ってしまったのかとも思ったが、タツキの薄い腹にも、その上のピンク色の乳首の辺りにも、小さな小さなペニスにも、濡れた痕はない。

（……はあ……）

気分は落ち込むが、しかし考えてみれば初日で楽しみが終わってしまうよりはよかった——かもしれない。（そうだ！ なるべく疲れさせて、夜更かしさせて、昼寝をさせれば……！）

そうすれば明るい日差しの中で夢精する瞬間を見ることが出来る。

（なんだ、その方がいいじゃないか）

無理に夜更かしをさせるのはよくないが、自然と寝るのが遅くなったという程度ならいいだろう。もしくは午前中のうちに全力で疲れさせるか。

（だが……ふむ。セックスで疲れさせるのだったら得意なんだが）

普通の生活では、むしろ大里の方が体力がない。

実際、昨日の山登りのせいかな、たった一晚の徹夜だというのに体はずんと重くなっている。

「ん……大里さん……？」

「ああ、おはよう」

「おはようございます……」

寝ぼけ眼をこする手までかわいい。

「あ……」

上体を起こしたタツキが、自身のむき出しの下腹部を見た。

「えっと……」

「夢精はしなかったよ」

「あ……そうですか……」

「えっちな夢は見た？ 途中、おちんちんは起ったけど。生理的なものかな」

「……見ました」

「どんな夢だった？」

気分の高揚で、寝不足による体の重みが消えていく。

「お、大里さんが……」

「うん、私が？」

彼の夢の中で、自分はいったいどんなことをしたのだろう。フェラチオだろうか。それともセックスか。そんなことを考えると、体が前のめりになるのを止められない。

「指先で……おちんちんの先っぽをとんとんって……」

それは、夜中に大里がしたことだった。精液に向かって「出ておいで」と念を込めて呼んでいた。

「タツキくんはそれをされてどうしたの？」

「射精したくて……でもイけなくて苦しくて」

朝とは思えないほど体温が上がってくる。

期待に胸を高鳴らせる大里を、タツキが上目遣いで見つめた。

「……うん？ どうした？」

「ひ、ひかないですか」

「ひく？ そんなことあるわけがない。何を言われても嬉しいよ。タツキくんのことをもっと知りたいからね」

タツキは一度目を強く閉じ、それから膝を抱えた。

「大里さんの手に、こすりつけました……」

「ああ……」

思わず天を仰いだ。夢の中ではなく、実際にしてくれたらよかったのに。

「すみません……」

「いや、嫉妬してるだけだ。夢の中の私に」

「え——」

「してほしいよ、私に」

「あっ……」

ふいとそらされた顔。それが男をあおるということを、この子はまだ知らないらしい。

「いつか、してね」

「いつか……」

「夢精の後とか」

タツキは目を潤ませて頷いた。

「……はい」

（本当にかわいい……）

今すぐにでも押し倒してしまいたかった。しかしそれをすれば、確実に射精させてしまう。

「じゃあ、顔を洗いに行こうか」

朝の身支度を終える頃には、タツキの性欲は多少落ち着いたようだった。

かまどからの音に耳を傾けながら、ご機嫌な顔で大里に笑む。

「もうそろそろご飯が炊けますよ」

「毎日久鍋で炊いたご飯が食べられるなんて贅沢だな」

「今日の朝ご飯はおにぎりとお味噌汁、漬物だけです」

が大丈夫ですか」

「じゅうぶんすぎるくらいだよ」

目の前にはかわいい男の子が全裸でいるのだ。それ以上のオカズなどない。

（皿がタツキくんだったらなおうまいが……）

あまりわがままを言えば、嫌われてしまうかもしれない。それは避けたい。ひとまず欲望は胸にしまい、男性盛りはもう少し仲良くなってから頼むことにする。

朝食を終えると、タツキはもじもじしながら大里をいけすに誘った。昼食用の魚を釣るという。

タツキは、昨日手とペニスを洗った川の上流に向かった。大里も後ろをついて行く。

五分ほど緩い傾斜を登っていくと、川の一角を竹組みが区切った場所に着いた。

「こちらがいけすです」

「すごいな。川を使うことで、きれいな水を自然に循環させているんだね」

「はい。魚もたくさんいますよ」

いけすの岸側の一部には、竹組みがのせられていた。そこには二十センチ四方の穴が開けられており、川の中を覗き込めるようになっていた。

「ああ、本当だ。たくさん見えるね」

いくらでも釣れそうなほど泳いでいる。残念なら魚の種類まではわからなかったが、何種類も違うものが

入れられているように見えた。

「でもこれはどうやって釣るのかな。釣り竿……はいよね？」

辺りを見回すが、物置のような建物はない。

「あ……その……」

タツキが手のひらを大里に差し出した。

「これは？」

そこにあっただのは、直径三センチ弱のシリコン製のリング。そこに結ばれた二センチほどの糸の先には、返しのついた釣り針がついている。

「これで釣り……ます」

「うん」

釣り針がついているのだからそうだろう。

しかし釣りをしたことのない大里には、使い道がまったくわからなかった。

「ええと……どうしたらいいのかな。これを竿につけるのかな」

「は、はい……」

「つけ方がわからないんだが……そもそも竿はどこに？」

辺りを見回すが、やはりそれっぽいものはない。

「もしかして、ちょうどいい木の枝を探すのかな」

だから、朝食を食べ終えてすぐに釣りをすると聞いたのかもしれない。時間がかかるから。

しかし黙っていたタツキが、そうっと首を振った。

「竿は、ここです……」

手首を握られ、引っ張られた。

（これは……）

もしかして。ひよっとして。胸が高鳴る。

昨夜も経験した、夢精をここで感じてほしいと言われた場所。

「ここ、に……つけてください……」

タツキのペニス。それが釣り竿だった。

「ああ……」

言葉が出なかった。空いた手で両目を覆う。

「あっ……すみません、おちんちんで釣った魚なんて——」

「嫌なわけではない！」

大里でも驚くほどの大きな声になってしまった。

ハツとして、勢いに気圧された様子のタツキの肩を握り、トーンを落として伝える。

「最高だ。それ以上の言葉が浮かばないくらいだよ！
本当に……ああ……なんて素晴らしいんだろね」タツキの胸に届くよう、一度そこで言葉を切る。「で、これは……つまりおちんちんの皮をむいて、カリに引つかかるようにしてつけたらいいということかな」

大里は自身を落ち着かせたつもりだったが、タツキはまだ圧倒されていた。

まばたきを繰り返すタツキの様子を見て、ハツとしてタツキの肩から手を離す。

「ああ、すまない。つい興奮してしまつて」

「いえ……あ、えつと、はい、その、おちんちんの先っぽに引っかけて、抜けないようにしてください」

もじもじしながら、それでもタツキは恥ずかしいところをアピールするように腰を突き出した。

「ま……待ってくれ……」

あまりの絶景に、脳の視覚処理が追い付かない。

かわいい男の子がぶらぶらするペニスを大里に向かつて突き出している——何にも勝る絶景だった。

（これは現実か？）

それとも過労で倒れ、都合のいい夢を見ているのだろうか。

「……すみません、はしたなかったですね……」

タツキが腰を引いてしまった。

瞬時に脳が切り替わる。もう、夢でもよかった。こういう時だけは敏捷に動く手が、タツキの腰を掴む。

「違うんだ！　今、脳が脳に絶景を焼き付けようとしていて……」

「脳が脳に……？　えつと……？」

言う必要がないことだった。困惑させて空気感を乱してしまった。後悔のあまり額を手で覆い、かぶりを振る。

「気にしないでくれ。さあ、もう一度おちんちんを」

地面に膝をついて股間を待ち構えると、タツキが少々困惑した様子で、それでもちゃんと大里に向かって腰を——ペニスを突き出した。

「ああ……最高だ。語彙力がなくてすまない。この感動をうまく伝えられたらよかったんだが」

「い、いえ……」

ひいているかもしれない。けれどそんなことはどうでもよかった。

「本当に素晴らしいよ。天国だ。今私は、この世のどの絶景にも勝る絶景を見ているんだ」

「そ、そんなにですか……？」

「頼む。もう一度おねだりしてくれないか」

「おねだり？」

「釣り針をつけてって」

理解したタツキが頬を染めた。小さなペニスが緩く起ち上がり始めている。

「……僕のおちんちん……ここ……」

大里のツボをとらえたらしいタツキが、「ここ」と言いながら足を肩幅に広げて腰を突き出した。

「ここ、に……釣り針をつけてください」

「ああ……ああ。もちろんだ。朝昼晩すべて魚が食べたよ。タツキくんがおちんちんで釣ってくれた魚……」

言葉にするだけで鼻血が出そうだった。くらくらす

る。

「ン……じゃあ、毎回おちんちに釣り針をつけてくれますか」

「当然だ！」

前のめりになったせいで、タツキが驚きたたらを踏んだ。転ばぬよう、慌てて腰を支え——たつもりだったが、手の位置が低く、尻を掴んでいた。せっかくなので、さりげなさを装って柔らかな尻肉を揉む。

「んっ……」

「ああ、すまない。手がいうことを聞かなかった。また驚かせてしまったね」

「い、いえ！ ああ、僕、おもてなし頑張ります！」

へらっと笑う顔がチャーミングだった。

（おちんちんのおもてなしっていう発想もかわいい）

大里の脳が勝手にタツキの言葉を改変し、顔がほころぶ。

（最高だ……産業医に感謝せねば）

それにしても愛らしいペニスだ。毛がないところもいい。こすられ慣れていないからか、表面まで普通より柔らかかそうに見える。

「あの……」

「ん？」

「釣り針……」

「あっ！ すまない。つい見入ってしまった。さあ、お

ちんちんを貸して」

刺激しないようそうと皮をむき、シリコンをかぶせる。しかし濡れていないのですべらない。これでは痛いだろう。

「ローションは——」

人工物だ。あるわけないよな、と言いながら気付く。

「舐めてもいいかな」

「えっ」

「ああ、大丈夫、イかせたりなんてしないよ。おちんちんを濡らすだけだ」

あと、ちよつとくらいは味わいたい。ちよつと……少し……多少……まあ、カウパーくらいは許されるだろう。たぶん。

「あ……はい……」

タツキが切なそうに目を伏せた。

どうやらイかせてほしかったらしい。もしくは耐えきれずイってしまったというのを期待していたのかもしれない。

「じゃあ……いただきます」

露出した亀頭をぱくりと啜え、シリコンをかぶせるカリの下辺りを重点的に舐める。

「あ——！」

驚愕したような嬌声だった。まさかフェラチオが初めてなんてことは——あるわけないか、と脳内で完結

する。

こりこりする裏筋を舌先で優しく撫で、唾液を丁寧にからませる。

「あーっ！」

タツキが腰を引こうとした。それを、腰に回した手で咄嗟に押さえて亀頭を舐める。

「あーあ！ あーあ！」

イってしまいそうなかもしれない。

さっと口を離す。

唾液が、亀頭と大里の口をつないでいた。

「ああ……ああ……」

なんで、と言いたそうな声だった。きつとイけると思ったのだろう。

「さあ、これでいい。濡れているうちに釣り竿を用意しよう」

さっき大里は朝昼晩の三食魚を食べたいと言い、タツキもそれを了承した。つまり最低でも日に三回は亀頭を味わえるということだ。しかも焦らせる。

（食事以上に楽しみだ）

スキップで山を走り回りたいくらいの気分でシリコンを小さなペニスに装着し、揺れる釣り針を指先で弄ぶ。

「これでいいのかな」

「は……はい……」

「おちんちん、つらい？」

「……はい……」

「うん。そうだね。つらそうだ。でもお魚にツンツンされても射精してはいけないよ。ねんねしている時に白いのを出そうね」

「っ……はいっ……」

どうやら、タツキは大里が想像する以上にMらしい。

(ずっとここにいたい……)

そして毎朝タツキの夢精を確認し、タツキのペニスが釣った魚を食べ、日中は乳首や陰囊だけをいじって体を高め、夜は抱き込んで夢精を楽しみに横になる——天国どころの話ではない。楽園か？ 己の語彙力の乏しさが憎い。

「大里さん、応援してくれますか」

「——え？」

妄想に夢中になっていた。

「釣り……」

「ああ！ もちろん。魚を驚かせてしまわないように静かに、でもずっと一緒にいるよ」

タツキがほっとしたように肩から力を抜いた。

小さな手が、大里の手首を握った。

それを一度放させ、手をつなぎ直す。

「あ——」

「この方が好きなんだけど、いいかな」

「……へへ、はい」

笑み。かわいい。こんなに愛らしい笑顔を浮かべる子が、今からベニスで魚を釣るのだ。

（淫らすぎるだろう……）

いったい誰がこんなプレイを考えたのだろうか。
ポーナスを贈りたい。

タツキが、いけすを覆う竹組みに開いた穴を指した。
「いつも、ここから餌を入れているんです」

「ああ、じゃあ餌がもらえらると思ってこちらに寄ってくるんだね」

「はい。なので、ここにおちんちんを……入れます」

「釣り竿を垂らすんだね」

「は、はいっ」

「じゃあ——」

いけすに促そうとした大里を、タツキが止めた。

「ん？」

「餌、を」

「ああ、そうか。ええと……もしかして虫を探すとかかな」

「いえ！ 練り餌を……」

タツキが、竹の葉で包んだ餌を大里に差し出した。

「……どうしたらいいのかな。本当に申し訳ないんだが、釣りはまったくの未経験者なんだ」

「その……おち……おちんちに……」

「おちんちに？」

なんとなく想像はついたが、言わせたかった。

「そっ、そのっ」タツキは下を向き、大里の視線から逃げながら話した。「き、亀頭、に……それでその、簡単に流れてしまわないように皮を……」

「ああ……」

大里のペニスが伸張する。

「タツキくんの亀頭に餌を塗り込んで皮をかぶせて蓋をすればいいんだね」

「っ……は、いつ……」

こんなにいやらしい釣り方が存在するのだろうか。

「餌の匂いで魚をおびき寄せるので……」

「うん、わかってる。なんでもいいんだ」

本当に、そんなことはどうでもよかった。釣果さえどうでもいい。ただただ、いやらしい釣りにしか興味が無い。

シリコンリングによってむき出しになった小さなペニス。ぶるんとした果実のような亀頭に、タツキの手作りだという餌を丁寧に塗り込める。

「っ、あっ、アッ……」

「もうちょつとかな？」

「んっ、それくらい、ですっ」

亀頭を指先でトントンしてからそうと皮を戻す。

「あ……」

色っぽい顔。半開きの唇。

「おちんちんで釣った魚を食べられるなんて楽しみだ」

「が、がんばりますっ」

「うん。でも釣れなくてもいいんだ。ただ、射精だけはしないように気を付けてね」

夢精は讓れない。

そんな気持ちでペニスに触れると、タツキが「あんつ」と高い声を上げた。

さらにテンションが上がり、タツキの腰に腕を回して『釣り場』にエスコートする。

「落ちないように気を付けて」

「はいっ」

タツキが、竹組みの上にうつ伏せになった。大里はすぐ隣にしゃがみ、穴にペニスが入っていくのを見守る。

「あっ……」

「冷たい？」

「はいっ……」

まだ午前中だからだろう。それでも川は流れているし、水温が上がっていないのだ。

「おちんちんはどうなってる？」

「ちっちゃく……になりました……」

「さっきまで膨らんでいたのにね。でも魚を釣れたら手で温めてあげるよ」

本当は手でこすり、口内で温めてあげたかった。

「っ……がんばりま——あっ！」

「食いついた？」

「はいっ……」

やけに早い。しかし魚にとってもタツキのペニスは魅力的だということだろう。

「んっ……ああっ……」

切ない声を上げながら、タツキが腰を引いて四つん這いになった。

「大里さんっ」

「うん、わかってる」

手を伸ばし、タツキのペニスにぶら下がっている状態の魚を針から外す。それは思ったより大きく、二十五センチほどあった。

「大物が釣れたね」

魚が重ければ、ペニスへの負担も大きいだろう。しかし魚を外している間に、タツキはそこを膨らませていた。

約束どおり、そこを両手で包んで温める。

「もう一匹頼みたい。おちんちんの釣り竿、頑張れるかな？」

「はいっ……頑張りますっ……」

健気な子だ。普通なら、魚のいるところにペニスを垂らすなんて怖いだろうに。

（いつかドクターフィッシュの水槽にペニスを入れさ

せてやりたいな……)

でもそれをしたら、きつと射精してしまうだろう。それはいけない。タツキにはかわいく夢精してほしい。

(いや、ピラニアがいるよと言ってドキドキする姿も見てみたい……)

本当にピラニアを入れることはしないが、もしそれでもベニスを沈めてくれたら、支配欲が満たされそう
だ。

「さあ、もう一度おちんちんを」

「はいっ……」

タツキが大里の手を握り、うつ伏せになった。

「あっ……」

「ん？ もう食いついた？」

「いえっ……あっ、アッ」

どうやら魚にいたずらをされているらしい。

(私もしたい……)

魚になって、皮のすばまりをばくばくと口でいじつてやりたい。釣れたと思わせて逃げ、何度でもベニスを水中に垂らさせたい。

「あっ」

「釣れた？」

「ンッ……いえっ、あっ！ あっ、だめえっ」

「どうしたの？ 教えてほしいな」

「おちんちん……亀頭っ、つんつんってっ！」

ずるい。

魚に嫉妬したのは人生で初めてだった。

「えさっ、餌ばかり食べちゃだめえっ」

「魚まで魅了するおちんちんってことだよ。さあ、動くと魚が警戒してしまう。おちんちんも膨らませずにおとなしくできるかな」

「もう膨らんじゃいましたあ……」

勃起した。いや、さっきからしていたが、さらに大きくなった。

（入りたい……）

魚を釣るタツキのアナルに突っ込んで腰を振ってしまいたい。

（そんなに激しくしたら釣れないよお……なんて）

言われたい。

（おちんちんから出る白いのが魚の餌になっちゃうよお……なんて）

言われたい。言わせたい。

「あっ……大里さんっ！」

呼ばれて、はっと我に戻る。

「うん？ 食いついたかな」

「あっ、あっ！ はいっ！ あっ、気持ちいいよおっ」

「ん？ どうして気持ちいいのかな？」

「魚がっ、動いてっ」

「ああ、逃げようともがいているのか」

タツキは魚から与えられる快感に負けてしまい、腰を浮かせられないようだった。

「さあ、おいで」

快感を欲していることに気付いていないふりをして、タツキの腰を引いてやる。

「あっ……」

残念そうな声が大里のベニスを直撃する。

「魚も可哀想だし、おちんちんもつらくなっちゃうからね」

適当なことを言って釣り針から魚を外す。今回の魚は十センチほどしかなかった。これではほとんど食べる場所はないだろう。

タツキに見える位置でリリースする。

「あっ……」

「ごめんね、まだ小魚かと思って。もっと大物を釣れるまで頑張ってくれる？」

「大里さんっ……」

甘えた声だった。タツキの体をひっくり返し、正面から抱きしめる。

「うん？　つらくなっちゃったかな」

タツキが大里の胸の中で首を振る。

「つらくないっ……でもおちんちんが切ないっ……」

「ああ……」

思わず天を仰いだ。ここに来て、いったい何度目だろ

う。

「大里さんっ……」

「うん、いきたくて切ないね。でも夢精のためだ。今夜は特にえっちな気分で寝られるように、なんでも協力するよ。タツキくんがしてほしいと思うことを全部してあげる」

「あ……なんでも……？」

「ああ。なんでも」

「ん……頑張ります」

大里は何度も言葉でタツキを励まし、時折いたずらに無防備な尻を割ってアナルを覗き見しながら魚がかかるのを待った。しかし大里の行為に感じたタツキが動いてしまい、なかなか魚は食いつかない。

「困ったね。これでは昼食が足りなくなってしまう」

「うう……ごめんなさい……」

「ああ、ごめんね。責めてるわけじゃないんだ。ただ、えっちになっってしまうタツキくんがかわいくて」

だからつい、いじめたくなってしまう。

「頑張っつて釣ります……」

「ありがとう。さあ、もう一度おちんちんを」

タツキを膝立ちにさせ、亀頭を露出させて餌を塗り込める。皮を戻すと、タツキが「あんっ」とかわいく啼いた。

「おいしそうだ」

「人間の餌じゃないですよ？」

「魚になりたいと思ったのは人生で初めてだ」

タツキをうつ伏せに寝かせ、ペニスを水中に沈めさせる。

「あ……あっ……」

「どう？」

「お魚、来てますっ！」

「うん、じゃあパクツてしてもらえるのを待とうね」

いたずらしてしまいたい欲を必死に抑え、タツキを落착させるように背中を撫でる。

「あ……あ……」

もう、声だけでわかる。今はまだ、ペニスを魚に弄ばれているだけだ。

「おちんちん気持ちいいね？」

「はいっ……！」

頭を撫で、背中を撫で、丸みのある若い尻を撫でる。しばらくそうしていると、タツキの声が高くなった。

「アッ……！」

「ああ、食いついたね。これで終わりだよ。あと少し頑張って」

タツキがこくこくと必死にうなずきながら腰を引いて四つん這いになった。大里も手を伸ばし、しかしふと考え直してタツキの背後に移動した。

「大里さんっ……?」

「大丈夫。後ろから、ね」

察したタツキが膝を開いた。その間から、ペニスにぶら下がる魚を支える。

「お尻の穴もかわいい」

「っ……やあっ」

「ああ、魚が跳ねる度にひくひくしちゃうね。今取ってあげるからね。もう少しお尻をこちらに突き出してごらん」

「はいっ……こう、ですか……」

「うん。絶景だ」

「え？」

「ああ、いや、これなら魚にしっかり手が届くよ」
今すぐアナルにむしゃぶりつきたかった。舌を入れて、中を愛される悦びを教えたい。

しかしそんな欲望はつばと一緒に飲み込んで、びちゃびちゃと動いてはタツキのペニスを愛撫する魚を針から外す。

今度の魚は二十センチ程度だった。魚をいけすの端に置き、大里の方に向き直ったタツキのペニスから、今度は釣り針付きのシリコンを外す。

その時、カリ首にシリコンが引っかかった。

「あっ……」

「うん、魚もおいしそうだし、おちんちんもいい感じだ。

勃起したままではつらいだろうが、おちんちんいじりは夢精のために頑張って我慢しようね」

「うう……はい……」

頑張ってくれたペニスを労わってから皮を戻し、疲れた亀頭をそうつと隠す。

「さあ、戻ろうか」

立ち上がったタツキは、甘えるように大里の腕に抱きついた。

タツキのペニスで釣った魚は絶品だった。それに、大里は野菜の収穫も手伝った。自分で育てたわけでもないのにみずみずしい野菜を摘み取るのは楽しく、ストレスが発散されていくのを感じた。

昼食の後は少しの休憩を挟み、夕食に備えてまたいけすで釣りをし、それらをタツキの裸を見ながら食べ、おちんちんが苦しいと色っぽい表情を浮かべるタツキの股間で体を洗ってもらい、床についた。

（結局今日は昼寝させられなかったが……）

しかしじゅうぶん体を高めさせることはできただろう。

今日は腕枕をされるのではなく、する側にさせてもらった。

「ああ……なんだかとてもドキドキするよ」

「僕もです……夢精、できるのでしょうか……」

大里の胸に頭をのせたタツキが、腕を脇腹の方に回した。縫りつかれるような体勢になり、ペニスがうづく。

「大里さん……」

吐息が胸に当たってくすぐったい。

「きつとできるよ。ああでも、不安ならもう少し体を高めておこうか」

「……はい。お願いします」

タツキが大里の胸から頭を下ろし、仰向けになった。行燈に照らされた暗い室内。

ぼんやりとした明かりの中で見るタツキの乳首は官能的だった。

「ん？ もう、少し膨らんでいるね？」

よく見えないな、とうそぶきながら薄い胸に顔を寄せる。

「あ……はあ、ンッ……」

「見られるだけで感じてしまう？」

「吐息、がっ……」

「ああ、そうか」

唇を細め、ふうつと乳首を狙って息を吐く。

「アッ……」

「敏感だ。さあ、こねてあげよう」

タツキを座らせて背後に回り、足を大きく広げさせて両乳首に指を這わす。

「ああっ！ あっ、あっ……」

「おちんちん、おつゆを垂らしているね」

「アアッ……」

苦しげな嬌声。

大里まで苦しくなってくる。

「あっ、アッ……」

「かわいい乳首だ。普段、乳首をいじることもないの？」

「あ……」

あるな、と思った。

「そうか、タツキくんは乳首でオナニーをしているんだね」

「っ……ち、ちが……」

かわいい嘘だった。

「違う？　じゃあこっちなな」

胸から肌を撫でながら腹をたどり、ペニスに触れる直前で手を浮かせて陰囊を包む。

「——ッア！」

「オナニーではこっちをいじってる？」

「あああっ……やあっ……」

苦しそうな声が大里の気分をさらに盛り上げる。

「どっち？　それとも違うところかな？」

ペニス以外の性感帯といえば、残るはアナル。でも今そちらに触れてしまったら、止まれる自信はなかった。張り詰めた陰囊を手のひらで揺らす。

「ああっ、ああっ……」

「ほら、もう少し——うん、いいかな」

「あ……」

手を離すと、タツキが大里の腕を握った。

「ん？」

「あ、あの……大里さんは……その、したくなりませんか」

「したいよ。とてもしたい。でも、まずはタツキくんの夢精が見たい。タツキくんがすつきりできたら、タツキくんにこすりつけながら射精したいな。もちろん、タツキくんが射精してしまわないようにちゃんと加減するから」

「うう……」

イかせてほしいようだった。

やはり、彼の中でオナニーは自然に反していても、誰かに射精させられることは反していない——もしくは、しかたないと思える範囲なのだろう。

「さあ、えっちな気分のまま寝ようね」

少しぐずる様子を残すタツキに腕枕をし、張り詰めたペニスをそうつと握る。

「うん。きつと今夜は夢精できるよ」

「はい……」

「寝ている間に思い切り気持ちよくなってごらん」

おやすみのキスをしたかった。しかし、セックスはよくてもキスは好きな人としかしたくないと思う人もい

る。いくらそういう仕事とはいえ、タツキの気持ちは尊重したかった。

(でも、いつかしたい——)

タツキの純粹さに惹かれていた。

オナニーはしないと自分に禁欲を課す頑固さや被虐性は官能的で、一方で、米が炊けるのをわくわくした顔で待つ様子や、おいしそうに食べる顔もギャップがあって魅力的だった。

タツキと、プライベートの関係になりたかった。そして家に連れて帰り、カメラを設置し、タツキの夢精を撮りたい。大里が仕事に行っている間は貞操帯でペニスを守り、タツキのオナニー我慢の手助けをしてやりたかった。

そして大里は、タツキが夢精できた時に思い切り彼のなかを貫く——。

(……と妄想するのはいいが)

セックスを夢精時に限定してしまうと、大里自身も禁欲を余儀なくされることになる。それは受け入れられない。

(それにしても……単純なものだ)

ここに来る前は多忙と過労で性欲だって失っていたというのに、タツキに会った途端元気になった。

(私も早く射精したい……)

タツキの夢精に関係なく、明日は射精をしようと決

める。

(どうやって出そうか……どこに……)

考えているうちに、大里のまぶたは閉じていた。

3

爽やかな山の空気。涼しい風。部屋に差し込むきらめく日差しの中で、大里はうなだれていた。

「……なんということだ……」

大里はつい先ほど、ハッとして目を覚ました。そして眠ってしまっていたことに気付いて絶望し、まさかと思つて体を起こしたところ、タツキの腹に精液と思われる乾いたものを見つけた。

「すみません……」

大里と同じくらい泣きそうな表情のタツキを見て、慌てた。

「いや！ 違うんだ、タツキくんは少しも悪くない。それよりも気持ちよかったかな？」

自分でもわかるカラ元気だった。どうして寝てしまったのだろう。いや、仕事で疲れていたところに山登りをして、一昨日は徹夜で夢精待ちをしていた。寝てしまふのはしかたのないことだった——と頭ではわかつていても受け入れられなかった。大切な大切な、月に一度の夢精を見逃してしまった。

——絶望しかない。

(一か月……次は一か月後……)

どう考えても、その時大里はここにはいない。

「大里さん……本当にすみません……」

「ああ、いや……すまない、本当に気にしないでくれ。

気持ちよくなれたかな？」

「はい……すぐ……」

「どんな夢を見たの？」

泣きたい気分だった。自分をぶん殴りたい。昨夜に戻り、自分の目をこじ開けてやりたい。

「お、大里さんが……」

「うん」

少しだけ気分が浮上する。

「大里さんが……僕のおちんちん、ぺろぺろって……」

「ああ……」思わず手で目を覆う。「そうか、私のフェラチオで射精したんだね」

「っ……はいっ……」

「せっかくだから、今しても？」

夢精はもう、諦めるしかない。それならせめてタツキを味わいたかった。

「え？」

「もう夢精はできただろう？ お掃除フェラだよ。もちろん、射精はさせないように気を付けるから」

「……は、はい……」

タツキが膝をすり寄せ、不安げな様子で大里の腕を握った。

「……もしかして、フェラチオの経験がなかった……わけじゃないよね？」

「ない……です」

「え、本当に？」

「はい……あの、昨日の釣りの時が初めてで……」

（なん、と……！）

それならあの時、もつと味わえばよかった。何時間もかけてねつとりとした舌の感触を教えてやればよかった。

そんなふうの後悔すると同時に、知らず知らずのうちにタツキの初めてをもらえていた喜びをかみしめる。

——と同時に、困惑していた。

これまでの客はこんなにかわいいペニスを放置したのか。できたのか。他の客の目は節穴か？　ここにいったい何をしに来たんだ？　光合成か？

「……じゃあドキドキしちゃうね」

そう言う大里の方が興奮していた。

くたりとしたペニスを持ち、皮の上からそうっと口づける。

「あっ……」

「柔らかくて肌触りがいいよ」

不安にさせないよう、感想を伝えてから口を含む。

「アッ！」

温かい。それにとっても柔らかく、生まれたての赤ん坊を胸に抱いているような気分になった。

（すごいな……人生で二度目のフェラチオか……）

唇で優しく食むと、それはすぐに硬くなり始めた。舐めることはせず、その小さな刺激だけで勃起させる。

「っはあ、あ、あ……」

刺激が弱いからか、タツキの嬌声も控えめだった。

その抑えられた態度と、大里の足に触れる硬い床とかさついた藁の感触に、数百年前にトリップしたような錯覚を覚える。

（官能的だ……）

若い頃、動画をあさっていた際に偶然目にした時代モノのAVが思い起こされる。

あの、しっとりした大人の雰囲気。最近のAVとはまったく違う空気感。

「あ……ああ……大里さん……」

「色っぽいね。夢の中では、どんなふうに舐められたのかな」

「あ……今、みたいに……」

「こうして啜えているだけ？」

「はい……でもそれがすぐえちでっ……！」

オナニーさえしないので、わずかな刺激や興奮だけでも射精できてしまうのだろう。

（回転式電動オナホールなんて使ったらいいだろう
なってしまうんだ……）

してみたい。今すぐ、ぜひともしてみたい。

暴れたら危ないからと言って手足を拘束し、守るもの
のないこの無防備なペニスを――。

「ンッ、大里さんっ！」

ハッとして口を離す。

「すまない、つい」

ペニスを吸ってしまっていた。

「出ちゃうっ……」

「おっと、それはいけない。ごめんね。お掃除をするだ
けの約束だった」

親指と人差し指でペニスの根元を挟み、尿道の残滓
を絞る。

「あ……あ」

「ああ、出てきた。まだちょっと残っていたね」

尿道口にわずかに出てきた液体を舐め取り、皮を戻
す。

「ご馳走様」

「うう……」

「ああ、あとこっちも」

腹の上の乾いた精液も丁寧に舐め取ると、タツキは
乳首までも硬く勃起させていた。

「大里さんっ……」

「……かわいい」

タツキは、さつきとは違う理由で泣きそうだった。

「ううっ……」

「つらくさせてしまったね、すまない」

抱きしめると、タツキは強く縋りついてきた。

「おちんちんっ……」

「うん、苦しいね。川で冷やしてしずめようか」

それには、いやいやと言うように顔を胸にこすりつけられた。

「じゃあ、落ち着くまでこうしていよう」

背中を撫で、ぼんぼんと叩いてやる。

けれど、タツキは再び首を振った。

「……さ……は？」

「え？」

声が胸にこもってしまい、聞き取れなかった。

タツキがかわいい顔で大里を見上げてくる。くりつとした大きな目。ぱつちりの二重瞼。低めの鼻。ピンクのぷるんとした唇。

「大里さんは？ おちんちん、つらくないですか」

「まあ……」

つらい。普通に、つらい。しかし自分の欲望よりも、大切にしたいのはタツキだった。

「私はいんだ。後でどこかで抜いてくるから」

「え……やだ……」

夢精した後だからか、甘えん坊だ。子どものような話し方が愛らしい。

「大里さん……」

タツキの腕が大里の首に巻き付いた。

「僕……ぼく、で、射精してください」

タツキに射精はさせず、しかしタツキの体で射精する。

いったいどういう方法があるだろうか、なんてことを考えたのは一瞬だった。

「ありがとう！　じゃあ素股がいいな」

返すのが早すぎたのか、タツキは一瞬あつけにとられたような顔をした。

「え、と、——素股って」

「タツキくんの足の間でこすりたい」

「あ……」

タツキを仰向けに寝かせ、両足をひとまとめにして抱える。

「もし射精してしまいそうになったら教えてね」

足の付け根にペニスを差し込——もうとして気が付いた。

（ローションがないじゃないか……！）

絶望する。せっかく腰を振れると思ったのに。

動きを止めた大里を、タツキが小首を傾げながら見

上げた。

「……あの？　どうかしましたか」

「普段、どれほど人工物に命を助けられていたのかと思っ
てね……」

「え？」

仕事はできるつもりでいた。外見もまあ、けなされた
ことはない。それでも、いかに自分が無力で無能かを思
い知らされた。

ローションがなければ素股さえできない。考えてみ
れば男性同士のセックスも、オナホを使ったオナニー
も、すべてローションが必要だ。男はローションに支え
られている。文明の利器。そんなことにも気付かずのん
きにこれまで生きていた。ローションなんて、あつて当
たり前だった。手を伸ばせばそこにある、それがロー
ションだった。しかし今は、それがない。

「大里さん……？」

かといって、素股を諦めることはできなかった。

「舐めてもいいかな……」

「え？」

「太もも。おちんちんは舐めないように努力するから」
ローションの代わりになるもので、ここにあるとい
えば唾液くらい。すぐに乾くし、量も必要だ。それでも
やってみないとわからない。ちよつとこすれば、先走り
はすぐに出る。

「ローションがないんだ」

「ローション……あの、潤滑剤ですよね？」

「うん。でもしつかり舐めて、痛みは与えないようにするから——」

必死だった。じゃあやめましようなんて言われたら困る。落ち込む。絶望する。

「ないわけじゃないんですけど」

「え……あるの？」

大里の食いつきに、タツキが引いているのがわかった。

こほんと空咳をしてから背筋を伸ばす。

「ええと……あるの？」

「でも古くって」

「……開封済？」

他の男が使ったものは新しくても嫌だった。

「いえ！ 作ったんですけど」

「作った？ ローションを？」

「通和散つうわさんってご存じないですか。昔の潤滑剤なんですけど。海藻とか葛とか卵を混ぜて……でも使わないまま時間が経っちゃって」

「へえ、よくそんなものの作り方を知ってたね」

「あ——……作っているのを見ていたことがあって」

「ふうん……？」

山暮らし体験の場だ。もしかしたら、タツキと同じく

自然体を好んだ客がいたのかもしれない。

——とそこで、ひらめいた。

「そうか！」

「お、大里さん……？」

そうだ、その手があった。

天才だ、と脳内で自画自賛する。

「卵だよ！ そうだ、それがあった！ 卵を一つくれないか？ もちろん無駄にはしないよ。終わったらちゃんと舐め取る。約束する」

「あ……いえ、生食はちょっと」

タツキが身をよじった。ハツとして、抱いたままの細い足を放す。

タツキはかわいいお尻を大里に向けると、土間から鶏卵を一つ持って戻ってきた。

「どうぞ」

「ありがとう！ 助かる。恩に着る」

「いえ、そこまで……」

「さあさあ！ 横になって！」

卵を割り、タツキの腹に落とす。ローションとは粘度の違う液体。これが最高の快感をくれる。

「ああ……素晴らしい。よかった。本当に」

「喜んでいただけで何よりです」

タツキは幼児を見るような目を大里に向けて笑っていた。

「すまない、うるさかったね。つい」

「いえ、その……かわいいです」

へへ、と笑うタツキの方がかわいかった。今からいやらしいことをするのに、と思うとそのギャップに萌え、腹の卵を手早くタツキの股間に塗り付ける。

「あっ……」

「タツキくんはオナニーしないから、こういうぬるぬるにも慣れてないんだよね」

「はいっ、アッ……つくう……」

「このぬるぬるでおちんちんをシコシコしたら、最高に気持ちいいと思わない？」

「あ——」

タツキの目がうつとりと細められた。想像しているのだろう。けれど一瞬でもそれ叶えたら、大里の方が我慢できなくなってしまう気がした。

「じゃあ、ちよつと借りるね。やっぱり四つん這いにしよう」

ささつと自身のペニスにも卵を塗り付け、タツキの体を反転させる。閉じた太ももに勃起を差し込むと、それだけで熱い吐息が口から漏れた。

「ああ……最高だ。すごくいい」

「あ……大里さんっ……」

「ん？ 挟んでるだけで気持ちいい？」

「あつい……」

タツキの初心な反応が、大里の熱を高める。

慣れたローションとは違う卵のぬめり。そして待ちに待った快感。抱けるのに抱かない、というもどかしさ。「タツキくんに興奮してるから。すぐくえっちでかわいくて」

「やあ……そんなこと……」

「あるよ。すごく魅力的だ」

しかも、タツキには我慢を強いて大里だけが射精するのだ。その背徳感に興奮が高まり、これ以上話している余裕はなかった。腰を引き、そして押し込む。細い足を抜けた亀頭が空気に触れる。それが再びすぐに柔らかな太もものに包まれる。

「っは……」

「アアッ！」

「ん？ タツキくんも気持ちいい？」

感じている声を聞くと、自分の快樂よりもそちらが気になってしまう。

「わか、なっ、アッ、アッ」

「かわいいね。ほら、ここはどうかかな？」

「アアッ！ ああっ、ああっ！」

切ない声。他人から与えられる快感に耐えるタツキの背を見下ろしながら腰を振る。

「タツキくん、そろそろ出すよ」

「あ——」

「タツキくんもまた早く夢精できるといいね」

タツキの太ももにきゅっと力が入った。いきり立った勃起は、そんなわずかな筋肉の動きまでしかと拾った。

「っ——…！」

いく瞬間、どうしてもタツキの顔を見たくなかった。ペニスを足の間から引き抜き、強引にタツキを仰向けにさせたその瞬間、精液がタツキに向かって飛んでいた。

「くっ…！」

思わず目を閉じる。数回の脈動の後にまぶたを開けると、頬に白濁をのせたタツキと目が合った。

「！ す、すまない！」

もう若くない。まさかそんなに飛ぶとは思わなかった。

絶頂の余韻も忘れ、慌ててタツキの頬を指で拭う。

「いえ、全然——」

指についた精液はひとまず自身の足になすりつけ、タツキの小さな顔を両手で包む。

「目には入らなかった？ 鼻は？ 口は？」

「大丈夫です」

ほほ笑むタツキの目は潤んでいた。射精した大里とは違い、まだ官能の熱を残している。

「——よかった。本当にすまない」

「いえ！ あの……き、気持ちよくなってもらえましたか」

「最高だった。本当に」

汚れていない方の手でタツキの頭を撫で、額に唇を寄せる。

逃げるかなと思ったけれど、タツキは甘えるように大里の腕を握った。

「あつ、あつ！ 魚つ、魚がつ」

「うん、食いついたね」

大里が絶頂した後は、タツキの射精欲が落ち着くまで抱き合い、静かな時を過ごした。幸せな時間だった。

しかしあつという間に時間が過ぎて腹が減り、タツキが握ってくれたおにぎりを食べてからいけすにやつてきた。

大里はタツキのペニスに食いついた趣味のいい魚を針から外すと、いけすに戻らぬよう地面に置いた。

「あと一匹、頑張れるかな」

「はい……」

健気な上目遣い。

タツキの尻の辺りを撫でながら促す。

「さあ、おちんちんを」

小さなそれは軽く勃起している。

「あ……お水に入ったあ……」

甘えん坊な声。タツキがぎゅうと大里の手を握る。

「おちんちん、気持ちよくてもびくびくさせてはいけないよ。魚が逃げてしまうからね」

「はいっ……」

なんて献身的な子なのだろう。大里の腹を満たすために、男の子の大切なところをいけすに入れている。

「今日はどんな料理を作ってくれるの？」

「串に刺して囲炉裏で焼くのはいかがですか」

「おいしそうだ！ 今すぐにそれを食べたいくらいだよ」

焼くのに少し時間がかかると言われたけれど、かまわなかった。その間は、タツキを抱っこして乳首をいじりたい。

「んっ……」

「どうかな？ 食いついた？」

「つんつんだけ……」

「ああ……魚もタツキくんのおちんちんをいじりたくて仕方がないんだね。私もしごいたり、舐めたり吸ったりしたいよ。でも射精させてしまうから、我慢しているんだ」

「うう……」

少しでもタツキを高めさせ、夢精させたい。残りの時間では難しいことはわかっている。けれど最後の夜まで諦めたくはなかった。

魚が釣れたところで、大里とタツキは小屋に戻った。囲炉裏の用意と、米の炊飯。他にも味噌汁なども作ると言われたが、体に触れていたかったのでそちらは断った。

魚に火が通るまで、タツキの乳首をこねまわす。

「アッ、あつ、あつ」

「うん、かわいい。いけすでは動かすのを我慢していたから、今その分もおちんちんを揺らしているね」

夢精が見たい。どうしても、見たい。

気持ちよくしてやりたいし、甘えられたいと思う。でも、やっぱり夢精欲が勝った。

力を入れて乳頭をこねたり、そうつと撫でるだけにしてたり。気を抜くという手がペニスに向かってしまうので、大里自身も気を抜くことができなかった。

「っはあつ、んっ、あつ、あ、アッ……！」

「乳首、ビンビンになつて。これからは乳頭で魚も釣れそうだよ」

「やあつ、そんなッ、アッ」

左右の乳頭と、カリ首。その三点で同時に魚を釣る様子を妄想する。

（最高じゃないか……最高すぎるじゃないか……）

例えば左乳頭に魚が食いついても、右乳頭やペニスをつんつんしている魚がいるかもしれない。となれば、

様子見を続けなくてはならない。逃げようとする魚、食いつこうとする魚、タツキを弄ぼうとする魚——翻弄されるタツキは、きつとかわいい声で啼くだろう。

「アアアッ！」

ひととき大きな嬌声を聞いて我に返る。つい、乳首をいじる指先に力が入ってしまった。

「すまない、痛かったかな」

「んんっ、きもちっ……」

「ああ、タツキくんは強くされるのが好きなんだね。でも刺激に慣れてしまうと、夢精までの我慢がつかなくなってしまうよ」

「やあっ……イきたいっ……!」

「うん、そうだね。たくさん我慢してムラムラして、夢精できるように頑張ろうね」

できることならタツキを家に連れて帰りたかった。そしてエアコンで室温を裸に合わせて設定し、タオルケットを掛けさせずに眠らせ、股間付近を全方向から撮れるようにカメラをセットする。当然、大里も極力起きてその瞬間を待つ。見やすいよう、撮りやすいよう、けれどタツキの睡眠を邪魔しないよう、下半身にだけライトを当てて。

（腰を揺らしたりするんだろうか）

夢精の瞬間など見たことがないし、自分がしたことがあるといえば精通した時の一回限り。だからどのよ

うな感じだったかなどわからない。

（まさか寝ながら自分でいじったりするんだろうか……）

どうであっても、タツキが射精するところが見たい。ただそれだけだった。

「大里さんっ……」

考え事をしながらいじってしまっていたせいか、タツキがずずつと洩をすすった。慌てて乳首を解放する。

「すまない、つらかったね」

「いきたいっ、ですっ……」

「うん、じゃあおしまいにしよう。ああ、魚が焼けたんじゃないかな」

タツキは食欲なんてないだろう。大里も性欲の方が勝っていた。けれど強引にでも意識を切り替えないと、なし崩しに押し倒してしまいそうだった。

「タツキくん」

ぎゅうと体を丸めたままのタツキを抱きしめ、頭を撫でる。

「ゆっくり息を吐いてごらん」

自分で高まらせておきながら、落ち着かせようと声を掛ける。その背徳感にぞくりとした。

「深呼吸をするんだ」

イきたいと泣いたタツキが、健気に大里の言うことを聞く。

「大里さん……」

「うん、上手、いいこだね。後でまたおっぱいをいじろう。夢精できるかもしれないよ」

「あ……」

タツキはどう思っただろう。夢精のために頑張って耐えようと思っただろうか。それとも無理だからやめてほしいと思っただろうか。

「魚の様子はどうか。タツキくんのおちんちんが頑張って釣ってくれた大切な魚だ」

タツキが気だるげな様子で囲炉裏に身を乗り出した。

「もう……いいと思います」

「よかった。じゃあ米をよそってくるよ」

「いえ、僕が……やっぱり味噌汁も用意します」

「ありがとう」

少し一人にしてやった方がいいかと判断し、大里は離れていく尻を見つめた。

昼食を終えると、大里とタツキは散歩に出た。

「夕食は何がいいですか」

「魚」

「……ずっと魚で飽きませんか？」

しまった。つい本能に忠実な返事をしてしまった。

「そうだね、すまない。タツキくんは肉を食べたいお年頃だよね」

「いえ！　そういうわけじゃないんですけど……大里さんが魚が好きで、魚を食べたいならいいんです。僕も魚、好きなので」

正直、好きなのは魚よりも釣りだった。釣りの経験なんてなかったのに、今は釣りが趣味だと胸を張って言える。名刺にも書ける。

「魚はさ、奥が深いよね。刺身でも、煮ても焼いてもいい。出汁も取れるし」

「はい。自然と命に感謝しています」

頭を殴られたような衝撃を受けた。

偉そうなことを言いながら、脳内にはタツキが釣りをする姿しか浮かんでいなかった。けれどタツキは命をいただいていることを意識していた。

（夢精夢精と夢中になっていたが、夢精だって精子だ。生き物だ……）

生命を弄んでいた。

——が、反省したところで夢精を見たい気持ちは変わらない。

「ここはいい場所だね。忘れていたことを思い出させてくれる」

「忘れていたこと、ですか」

西日がまぶしく、タツキの手を取って木陰に入る。

「うん。いろんなことを。生きている魚だって普段目にすることはないし。太陽だって、オフィスで書類やパソ

コンを見ている間にいつの間にか沈んでいたからね」

「少し寂しいですね」

「うん。そうやっていつの間にか毎日が過ぎて、あっという間に年を取って——」

気付けば老後だ。その時自分に何が残っているのだろうか。

ここに来ることなく日々を過ごしていたら、きっと何も残らなかった。

「大里さん……」

「でも今は、老後の過ごし方も意識できるようになったよ」

「どんなふうに、ですか」

「まずは釣りかな」

「釣り、ですか」

「うん。一般的な釣りの経験はないけど」

叶うなら、老後をタツキと過ごしたかった。自然の中で、月日や季節の移り変わりを言葉どおり肌で感じながら。

「秋のうちに冬ごもりの支度をして、寒い間は大切な人と家にこもってぬくもりを与え合いながら過ごせたら素敵だなんて」

「素敵です。そういう生活、いいですよね」

タツキが穏やかな目で大里を見上げた。

ほほ笑み合ったところで、なんとなく二人とも無言

になった。

しばらく静かに森の中を歩く。

鳥のさえずり、風が木々を揺らす音。川のせせらぎ。

自然体な地面を藁草履で歩く感覚に慣れて来た頃、
タツキの様子がおかしいことに気が付いた。

「ん？　どうかした？」

ちらちらと、タツキが大里の下半身を見ているよう
な気がした。

「あっ、す、すみませんっ」

「何も気にしてないけど。でもどうしたのかなって。何
か気になることがあった？」

「あ……その」

自然と、双方の足が止まった。

「うん？」

「……お、おっきいなって……」

「……ペニス？」

「はい……その、起ってないのに」

「大きい……かな？」

たしかに平均よりは大きい。しかし注目を浴びるほ
どだとは思っていなかった。

「大きいです。その、僕のなんて全然」

「ああ……」

比較対象がタツキなら、たしかに大きい。巨大と言っ
てもいいかもしれない。けれどそれは大里が特別な巨

根というわけではなく、大里が平均より大きく、タツキがかなり控えめだからというだけだ。

「遠慮せず、いくらでも見ていいんだよ」

「っ……」

「触っても」

「あ……」

タツキがおずおずと大里の股間に手を伸ばした。

下を向いているそれをそうと握る。

「……おっきい……」

「ありがとう」

可笑しかった。まるで子どもだ。こんな仕事をしていたら、他人のペニスなんて見慣れているだろうに。

「こんなに大きくて、困ることってないんですか」

「困ること？ うーん……」

初めてのセックスでは、慣らすのが大変。しかし同じ相手と繰り返すのであれば、次第になじむようになってくる——という内容が頭に思い浮かんだが、タツキに他の男の話はしたくなかった。それにどれも過去の話だ。長いこと恋人はいなかったし、仕事が忙しくて体だけの関係もなかった。

「特にない……と思うけど」

「お仕事中に起っちゃったりとか」

「ああ、たしかにタツキさんの勃起よりは目立っちゃうかもしれないね」

言いながら、タツキのペニスをわかりやすく見つめる。

小さなそれが、ぴよこんと応えるように跳ねた。

「裸で歩いていても、あまり違和感がなさそうだね」

「あ……はい。慣れもあるかもしれないですけど、あんまり気になりません。大里さんは気になりますか」

「そうだね。安定しないから」

「気が付かずすみません……下着だけでもはかれますか」

「いや、ここのルールに従うよ。それにタツキくんが大好きな自然体でいられると思うと嬉しい」

腰に腕を回すと、タツキの方から大里の方に寄ってきた。

（これは……）

素股の後、大里からタツキの額へキスをした時も拒否はされなかった。それどころか、甘えるように腕を握ってくれた。

（もしかして……？）

見込みがある、のだろうか。

次第に鼓動が速くなる。

（タツキくんと……特別な関係になれば）
最高だ。

タツキは、すれていないところがとてもよかった。最近の子が口にするような意味のわからない言葉も使わ

ない。ルックスも愛らしい。料理もうまいし、性にも献身的だ。

しかしまだ、タツキの個人的なことは何も知らない。今見せてくれている顔も、仕事としての一面だろう。

もつと——。

「タツキくんのこと、もつと知りたいな」

きよんとした顔が大里を見上げた。

「え？ 僕のこと、ですか」

「うん。タツキくんのこと、なんでもいいから知りたい」

「なんでも……」

突然の質問に、タツキは戸惑っていた。突発的なことへの対処が不慣れなところも愛らしい。

「じゃあ、好きなものは？ と訊かれてぱっと思いつくかぶのは？」

「夜空、でしょうか。庭から見ると、星がいっぱい」

「たしかにとってもきれいだった」

もしタツキと一つになりながら眺めることができたら最高だろう。騎乗位をしながらでもいい。

「あとは川のせせらぎも好きです」

「きれいな音だね。きれいという言葉はありがちで無粋だけど、きれいな言葉以外の言葉が思いつかない」

タツキがうなづく。

「水自体もきれいですし。夏は特に、日差しを反射して水面がきらきらして」

「そうだね。それに冷たくて気持ちいい」

「はい。僕も一人の時はよくそうしています。木陰で、水に足を浸けて」

「そうなんだ。じゃあ今から川に行こうよ」

「退屈じゃありませんか？」

「普段の生活が慌ただしすぎたんだよ。仕事と家事、それから携帯やテレビ、パソコンでの情報収集。脳も疲れ切ってる」

「じゃあゆつくりしましょう」

「うん。タツキくんは、こうしてほしいとかっていうのはないの？ 私の希望ばかり聞いてもらってしまっているよ」

「いえ！ そんなことはありません。だって僕の希望は大里さんにのんびり過ごしていただくことですから。」

自然の中で疲れを癒やしていただきたいんです」

接客業として、百点満点の答えだった。

しかしタツキの顔を見ると、それが本心のように思えてくる。

（この子は本当に自然が好きなんだな）

たしかにいいところだと思う。人間も含めて動物はもともと、自然の中で生きてきたのだ。これが本来あるべき姿だ。裸だ、ということも含めて。

「タツキくんと自然に癒やしてもらってるよ」

「嬉しいです」

「毎日かわいいおちんちんを見られて眼福だしね」

「あっ……」

タツキが手で股間を隠した。

「あれ？ おちんちんを隠すのは自然体じゃないよ？」

「う……すみません……」

「いいんだよ。恥ずかしいという感情も自然な気持ちだからね。そろそろ川に行こうか」

「はい」

二人で並んで歩きます。

本当は手をつなぎたかった。触れていたい。少しでもそうっと、タツキに視線を向ける。

「——あ」

目が合った。声も重なる。

驚くことに、タツキも大里の様子を窺っていたようだった。

「……すみません」

「いや……」

まるでお見合いだ。あとは主役二人で、と外野が退出した直後のよう。

「あー……その」

「は、はいっ」

「手を——手をつないでもいいだろうか」

「あ……はい……」

差し出された小さな手。野良仕事をしているとは思

えないきれいな肌。

大里が握ると、タツキもしつかりと握り返してきた。
でも、互いに言葉は発さなかった。

4

朝食はおにぎりと味噌汁、漬物。昼食は魚。夕飯は干し肉を調理したものだったり、魚だったり、その時に応じて。

食材の用意をしている時間以外は散歩をしたり、裸で抱き合ったり、川に足を浸したり。

寝る前は、思いつきタツキの体に触れた。顔を除く全身にキスをして乳首を吸い、舐め、ペニスを撫で、陰嚢を口に含んで転がした。

大里は、タツキの体で何度も射精をした。けれど挿入はしていない。キスだって、唇にはしていない。

そして、夢精を目にすることなく最終日の午後になった。

明日の昼にはここを出ていかなくはならない。

「あつという間だったな……」

「はい……」

寂しい、とタツキの顔にも書いてあった。けれどそれは仕事用に作られたものかもしれない。

この約一週間で、大里の中には明確にタツキへの特

別な感情が芽生えていた。それでもまだ、タツキのプライベートの顔は知らない。だからまだ愛ではなく恋だ、と思っていた。

「今日の夕食、魚でもいいですか」

「ああ、もちろん。嬉しいよ。早速釣りに行こうか」

「あーあの、今日は一人で用意してもいいですか」

「え……ああ……わかった。じゃあ私は散歩でもしてこようかな」

「すみません」

「いいんだ」

最後ののだから、タツキがペニスで魚を釣る様子を目に焼き付けておきたかった。しかしタツキ本人が一人で釣りたいと言うのだからしかたない。

（そうだな、一週間も一緒にいたんだ……）

大里は客で、タツキがかわいくてたまらないので苦痛ではない。しかしタツキからすればどこの誰ともわからぬただの中年のおっさんと、一週間も離れずに過ごしていたことになる。ストレスだって溜まっているだろう。あと一日くらい我慢してほしいと思わないでなかったが、特別な感情を抱いている相手に無理をさせたいとは思わなかった。

（そうだ、むしろ遠慮せず一人になりたいと言える相手だと認識してくれているということじゃないか）

そう自分に言い聞かせながら山の中を歩く。

何度もタツキと歩いた道ならぬ道。

タツキの表情、歩く度に揺れるペニス、交わした会話を思い出しながら進む。

（今頃タツキくんは……）

大里のために、自分でペニスに釣り針をセットしていけずにペニスを垂らしている。

それを想像した瞬間、大里のペニスに血が集まり始めた。

（だめだ、だめだ）

自分で抜くわけにはいかない。今日の夜——もしくは明日の朝、ここを出る前にタツキの素股で射精したい。

だから、今は我慢——。

欲望に抗おうとすると、足は自然と山の上の方に向かっていった。

タツキとは行ったことのない道。

上り坂。クライミングというほどではないが、急勾配。しかしここに來てから疲れが取れ、体力もついていた。

タツキへの肉欲を振り切るように登っていく。

しばらく進むと、小さな祠に出た。

年代物。しかし手入れはされているようだった。

御^{みとび}扉は閉まっており、中は見えない。しかしうつすらと龍の絵が描かれているのを見て取れた。

神事には詳しくないが、きっとタツキやタツキの一

族を守ってくれているのだろうと推測する。

手を合わせると、無性にタツキに会いたくなり、大里は慎重に山を下りていけすに向かった。

もうすぐタツキに会える。タツキの裸を見られる。

そう思うと一度はしずまったはずのペニスが再び勃起し臨戦態勢になった。

（あの子の存在はまるで媚薬のようだな）

タツキに出会ってから、体は枯れることを知らない。

（今頃、自分でおちんちんから魚を外しているんだろうか）

代わりにしてあげたい。そして頑張ったペニスを両手で包み、温めて褒めてあげたい。

大里のペニスの先端が欲望に濡れる。

タツキは、大里が今タツキに欲情し、雄をいきり立たせていることを知らない。

（見せつきたい……）

変態な欲望であることはわかっていた。それでも、どきどき自然生活は風俗なのだ。野外で裸をさらしている時点でイレギュラーなことをしている。勃起の見せつけくらい、したっていいだろう。

草木をかき分けながら最短距離でいけすに向かう。

手足に枝が引っかかりピリツとした痛みが何度も走ったが、それどころではなかった。今すぐ、一秒でも早くタツキのもとへ行きたい。それでなくても一緒に過ごせる時間は残りわずかなのだ。

（延長できるならいいが……）

難しいだろう。そもそも電波が届かないのだ。店に延長を伝えるべきがない。

ようやく、遠くにいけすが見えてきた。タツキの姿も確認できる。

ガサガサと進んでいくと、違和感を覚えた。

（ん？）

タツキが、いけすの端に膝をついていた。手には棒のようなものを持っている。

（釣りをしているんじゃないのか……？）

タツキには気付かれず、けれど様子も確認できるところまで進んで足を止める。

タツキは、タモを手にとっていた。魚を獲るための棒付きのネットだ。

（どうして……）

大里の目がないからか。

タツキはペニスを使わず、本来なら釣り竿にかかった魚を獲るためのタモで、直接いけすから魚を獲っていた。慣れた手つきで魚を掬い、次々と地面に置いていく。

今は一人的なことから、いやらしい釣り方をする必要はない。それは理解できた。しかし、言いようのないショックを受けた。裏切られたような気分だった。

（空いた時間を何に……？）

釣り時間の短縮。残りは、一人でのんびりしたいということだろうか。

声を掛けることはできなかった。それに、いつ小屋に戻ればいいかもわからなくなってしまった。

（この辺りをぐるっとしてくるとは言ったが……）

時計もない。だから具体的な時間の約束は交わしていない。

大里は踵を返すと、手足を傷つける枝を気にもせず山の中に戻った。

続きは製品版でお楽しみください。

約十万二千字です。

表紙の「？」の意味を考えながらお読みいただけたら嬉しいです……！

どうぞよろしくお願いいたします。

どきどき自然生活—サンプル—

©gooneone (ごーわんわん)

2026/7/28

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

商業情報は『リットリンク gooneone』で検索ください。

※すべての作品の無断複写・転載・複製を禁じます。

※作品はすべてフィクションです。実在する人物、団体等とは一切関係ありません。

※作品の利用に関して問い合わせた際、十四日を過ぎて返信がない場合でも、許可する旨の応答がない限りは一切の利用を禁じます。